

Title	豊岡藩と慶應義塾
Sub Title	
Author	吉家, 定夫(Yoshiie, Sadao)
Publisher	慶應義塾福澤研究センター
Publication year	2000
Jtitle	近代日本研究 Vol.17, (2000. ) ,p.69- 137
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20000000-0069">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20000000-0069</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 豊岡藩と慶應義塾

吉 家 定 夫

### 序 教育藩豊岡

兵庫県の日本海側、温泉で有名な城崎から円山川を十数キロさかのぼったところに豊岡市がある。市の中央を流れる円山川は低地を蛇行し、そのためよく氾濫した。豊岡ではこの氾濫で生じた荒原<sup>あわら</sup>地帯に栽培されたコリヤナギを材料に行李をつくる杞柳産業が発達した。江戸、明治時代を通じて豊岡は全国の柳行李の大半を産したといわれる。近世の交通の発達とともに軽い柳行李の運搬性が評価され需要が増大したが、江戸時代、この地を支配した豊岡藩は柳行李を藩の専売品として流通を統制し、藩の財政に役立てたといわれる<sup>1</sup>。現在の豊岡市では、柳行李作りの伝統技術を生かし、合成樹脂・繊維を素材とするカバン産業が発展し、この分野で全国一の生産量を誇っている。

この豊岡は前述したように、江戸時代の寛文年間以後、京極氏を藩主とする豊岡藩（外様）の領するところであつた。京極氏は約二世紀にわたって豊岡に在封し、九代目の高厚のとき廃藩置県をむかへる。幕末における豊岡藩の石高は一万五千石で、これは日本全国に二百数十あつた諸藩のなかでも極小藩の部類に属する。藩主京極氏は字多天皇から出ている系統で、公家的な性格の強い大名である。開祖の氏信は無双の歌人といわれ、氏信からかぞえて六代目の高秀も冷泉為秀の高弟であり、新拾遺和歌集、勅撰集などに多くの歌を残している<sup>2</sup>。また豊岡在住の前当主京極高光（杞陽）氏も俳人として知られている<sup>3</sup>。

このように文化の香り高い京極家を藩主に戴く豊岡藩ではあつたが、幕末におけるその貧しさと沈滞ムードは覆うべくもなかつた。豊岡出身の河本重次郎（後の東京帝国大学教授）は、幕末の豊岡藩の様子を次のように回想している。

豊岡は一小藩であり、かつ万事儉約一方のみにて、何一つ楽しむべきことはなかつた。ただし一年に三度は、多少とも人心に衝動をあたふる祭り事あるのみで、その他は実に森閑たるもので、無論男女の交際もなく、音楽もなく、芝居もほとんどなく、実に人間の快楽を全く欠ける生活は、士族屋敷の空気をして、さながら北氷洋の穴居における冷たさと、淋しさを感じしめたり。特に冬季雪深き頃は、何ともいへぬ寂寞たるものなり<sup>4</sup>。

ところが明治時代、この森閑寂寞とした豊岡から、多くの学者、教育者、教育行政家が輩出した。その内容は第一表の通りである。豊岡藩は浜尾新と久保田譲、二人の文部大臣を生んでいる。明治時代、全国二百数十藩の

第一表 豊岡出身の学者、教育者、教育行政家

氏 名	(生 年)	経 歴
◎久保田 譲	弘化 4 (1847)	文部大臣
◎村尾 真一	嘉永 1 (1848)	慶應義塾教師
◎吉村 寅太郎	嘉永 1 (1848)	慶應義塾教師、第二高等学校長、第四高等学校長
◎浜尾 新	嘉永 2 (1849)	帝国大学総長、文部大臣、東宮大夫、枢密院議長
◎神谷肅一	嘉永 2 (1849)	豊岡県師範学校長、豊岡小学校初代校長
沖野 忠雄	安政 2 (1855)	東京大学工学博士(貢進生)
河本 重次郎	安政 6 (1859)	東京帝国大学医科大学教授
和田垣 謙三	万延 1 (1860)	東京帝国大学法科大学教授
猪子 止戈之助	万延 1 (1860)	京都帝国大学医科大学教授
岡本 梁松(兄)	文久 3 (1863)	京都帝国大学医科大学教授
猪子 吉人	慶応 2 (1866)	帝国大学医科大学助教授(ドイツ留学中に客死)
下村 三四吉(弟)	明治 1 (1868)	東京女子師範学校教授
生駒 恭人	?	沖縄県師範学校長、三重県女子師範学校長

## ◎慶應義塾で学んだ経験あり

うち、旧薩摩藩と旧幕臣以外で文部大臣を二人以上出したのは旧豊岡藩のみである。この二人のほかにも、表中の学者の多くが日本でのそれぞれの学問分野の開拓者であり、講座や研究室の創設者である。このように、中央で活躍する教育関係者の出身藩が豊岡一藩に集中していることから、かつて「但馬は明治の教育家の名産地」といわれた<sup>5)</sup>。もっともこの但馬とは豊岡のとなりの出石藩も含み、この場合、加藤弘之東京大学総長が上述のリストに加わる。よく「長野県は教育県」ということが言われるが、もちろん長野県は一つの藩ではない。辻新次は松本藩、伊沢修二は高遠藩の出身である。これに比べると、石高一万五千石、藩士百人余の豊岡藩から、前述のように大勢の教育関係者が生まれたことがいかに特殊であったかがわかってう。〔長野県は、高等教育関係者よりも多数の意欲ある草の根教師がいたことで有名なのだらう。〕

明治時代の教育行政と高等教育に関しているならば、豊岡藩は日本全国の諸藩のなかで、もっとも多くの人材を輩出した藩の一つである。明治維新以降、政治・軍事

などの分野は雄藩出身者に独占されていた。そこで、その他の諸藩の多くは学術教育の分野に活路を求めたといわれる。豊岡藩はその試みに、日本中でもっとも成功した藩の一つである。

ではその成功の原因はなにか。この問に答えるには、豊岡の歴史と風土を顧みる必要がある、容易なことではない。ただここに、幕末・明治初期の豊岡藩の藩士教育に顕著な特徴が一つ見られるので、その点に焦点を合わせてみたい。それは藩費遊学生<sup>6</sup>の人数の多さ、そして遊学先としての慶應義塾との結びつきである。豊岡藩の教育立藩の試みには、草創期の慶應義塾が深くかかわっている。

## 一、豊岡藩遊学生

### ①幕末の豊岡藩

まず幕末における豊岡藩の動きを見てみたい。文久二年（一八六二）八月、幕府の参勤交代制が緩和され、大名の江戸滞在期間の短縮と、大名の妻子の帰国とが許された。豊岡藩では江戸藩邸の業務の縮小にともない、江戸詰の藩士の多くに帰国の許可があたえられた。同年十一月、藩主夫人が江戸を発し帰国の途についた。このとき豊岡藩家老猪子清をはじめ江戸定府の藩士で後に慶應義塾に入塾することになる、村尾真一、浜尾新らも豊岡に帰国したものと思われる。当時、村尾は十五歳、浜尾は十四歳であった。

豊岡は若狭湾の西側、舞鶴と鳥取の中間に位置する兵庫県の日本海側の町である。元治元年（一八六四）、つまり村尾、浜尾らが帰国した頃の町の人口は三千六百四十六人と記録されている。その町の西南にある城山（現在の神武山）のふもとに、藩主京極家の館を中心として約百軒ほどの藩士の家が並んでいる。幕末に江戸から引き

あげてきた藩士は、藩主の館の敷地内にあった武器倉を改造してつくった五軒長屋に移り住む。当時の村尾、浜尾らの様子を、前出の河本はつぎのように書いている。

豊岡の人で東京に出て、名を成せるものうち、同君（猪子清家老―引用者注）に有力なる後援を受けたる人ははなはだ多きが、そのなかにも浜尾新君は、もっとも秀でられたる一人なり。この浜尾家は、元来江戸在住なりしが、維新の際豊岡に移住せられ、その住居は長屋にて、猪子家の真向にあり、今でもその長屋は破小屋ではあるが残りて居る。その長屋には、維新の際江戸より国住となられた磯貝、一ノ瀬、東郷、浜尾、村尾、とこの順に五軒並べり。（中略）村尾はその主人早く東京に出て、福沢の塾に入り大に英語に達せるが、後ち横浜のある学校に教官中脚気で逝去せり。浜尾新君は、在國中、能書でありしたため、藩の金札に何文目とか記入することをしてをられた。<sup>8</sup>

浜尾新の父親は、新が五歳のときに他界している。豊岡時代の浜尾新は「家禄も僅かであったため、書をよくするところから筆記物などとして家計を補っていた」といわれるが、生活は楽ではなかったものと思われる。<sup>9</sup>

では、当時の豊岡藩の藩士教育の様子はどのようなものであったろうか。藩の教育機関としては藩校稽古堂がある。士族の子弟は七歳になると入学が強制され、十一年間で全課程が終了することになっていたという。<sup>10</sup>村尾、浜尾もここで学んだことだろう。稽古堂における講義の様子を、河本はつぎのように回想している。

稽古堂というは、正面垂簾の中に高座あり、これは君公のご座席なり。そのご座席前には十畳ばかりの広

問あり、士族は多くその周囲に順次列座せり。この稽古堂は主として三字教よりはじまり、四書五経が教課であった。今でも覚ゆるが、但馬に当時高名なる池田草庵先生という陽明学の大家が、祝南（宿南）という所に青谿書院というを立て、講学しておられたが、（中略）この人が時々稽古堂に招かれ給い、講演されるが、その上座に厳然と上下着けて着座あり、見台に向かわれ講演せらるる時、士族の面々、皆恭しく講堂の広間の周囲に列座して聴講したものだ。<sup>11</sup>

稽古堂の教科の中心は当時の諸藩の多くと同じように儒学であったことがわかる。では、ここに登場する青谿書院とはどのような塾だろうか。

青谿書院は但馬聖人と呼ばれた池田草庵が、郷里の宿南に建てた私塾である。宿南は生野代官所支配下の幕府領であるが、草庵が豊岡藩に招聘され、たびたび藩校で講義をしたので、多くの豊岡藩士が入門した。草庵の学問は、陽明学の帰寂派に属し、他派と同じように実践を尊重はするが、その実践も真の自我の発露でないといけない、心性から発するのでないと本物ではないとして、まず自己を磨くことを主張するものであったといわれる。<sup>12</sup> 豊岡藩家老舟木克己は、草庵と江戸の碩儒安井息軒とを比較し、「字義の詳密なることは、息軒先生あるいは多少の長あらん。されど滋味津々、人の肺腑を衝くが如きに至りては、同日の論にあらず」と語り、草庵を高く評価している。<sup>13</sup> 日記「山窓功課」によると、草庵の読書は、朱熹、王守仁など儒学者の著作を中心に、司馬遷『史記』、『日本書紀』、『徒然草』、頼山陽や荻生徂徠の諸著作、道元の『正法眼蔵』、『旧約』、『新約聖書』など、広い範囲におよんでいる。そのなかでも、福沢諭吉『西洋事情』を明治二年と明治八年の二回読了し、さらに明治六年には同『改暦弁』にも目を通して点に注目している。<sup>14</sup> 儒学者一般にありがちな、かたくなな洋学拒否の姿

勢は見られない。おそらく、柔軟な頭脳の持ち主であったのであろう。後に遊学生として上京した豊岡藩士のほとんどが、この青谿書院で学んでいる。彼らが上京後、抵抗なく洋学に入っていたのは、若い時このような姿勢の儒学者に学んだことが影響しているのであろう。

村尾、浜尾らが国元で過ごした文久二年（一八六二）から明治初年にかけての数年間に、日本社会は目まぐるしく変化した。

文久三年（一八六三）に幕府の生野代官所が襲われる生野の変が起きた。豊岡藩は鎮圧の兵をだすと同時に、豊岡では市中見回りを強化した。このとき浜尾は市中見回りに当たっている。<sup>15</sup>

翌元治元年（一八六四）には禁門の変が起こった。豊岡藩は敗走した長州藩兵の潜入を警戒して、領内に番所を設置し通行人を取り調べた。この警固役の名簿にも村尾、浜尾兩名の名前を見つけることができる。<sup>16</sup>この時、豊岡藩士古島玄三は浜尾とともに京口町の番所で警固の任に当たったことがあった。その時のことを、玄三の子で後に政治家になる一雄は、『故浜尾子爵葬儀記事並追悼録』の中でつぎのように書いている。

頃は夏のことでは夜は蚊帳を釣って寝たが、先生（浜尾）は蚊帳の中にはいるが、机に対して読書しているばかりで、横になって寝たことは見たことがなかった、警固に対する責任感からであったか、それとも読書趣味であったか知らぬが、いずれにしても感心な男だと思ふたと父が申しておりました。<sup>17</sup>

われわれの目の前にはじめて登場する若き浜尾は、蚊帳の中で読書をしている。このことは、その後の浜尾の生



涯を考えるならば象徴的である。また、後に選ばれて慶應義塾に遊学する卒（足輕）の吉村寅太郎について、元治元年十月の猪子の日記「日慎録」は、「去る八日、練場組の吉村寅太郎と申す者、不埒の次第これあるにつき、叱り追込み申し付け候」との物頭からの注進を記している。青年時代の吉村には血気さかんな面があったものと思われる。<sup>18</sup>

慶応二年（一八六六）には第一次長州征伐がおこり、豊岡藩も幕府の命により久美浜代官所の警固に藩兵を派遣している。このときも、浜尾は大砲役として派遣されている。また、慶応三年（一八六七）には豊岡藩の軍政改革が行われ、農兵小隊が組織されたが、浜尾はその調練の指導に当たっていたことが知られている。<sup>19</sup>この農兵調練において浜尾はすぐれた能力を示し、それが契機となって後に兵学研究の名目で藩遊学生に選ばれることになる。

時代の流れが、若い豊岡藩士の生活に強く影を落としていた。

## ②四人の藩遊学生

豊岡藩の遊学制度は『日本教育史資料』によると、すでに天保の中頃から藩費によるものが常に十余人いたとある。<sup>20</sup>吉田昇は『日本教育史資料』中の各藩の遊学規定を比較検討した後、豊岡藩は「比較的（遊学生の）人員の多い方の標準のようである」と結論づけている。<sup>21</sup>ではなぜ豊岡藩は遊学制度に力をいれたのか。この点については、豊岡藩自身によって「藩はじめて学をおこすや、教員に生徒に、その人乏しきをもって、将来成立の目的ある者を選び、ひろく良師をもとめてこれにつかしめざるを得ず」と率直に語られている。<sup>22</sup>つまり、藩内には優秀な学者がいらないとの自覚のうえで、豊岡藩は遊学制度に力をいれたのである。幕末から明治にかけて、豊岡藩

第一図 文部省通達 (明治四年九月)

舟木直光家文書

從來藩費ヲ以諸學爲修行東京其外へ差出候生徒  
今般廢藩被

仰出候ニ甘爲引取候向モ有之哉ニ相聞甚不都合  
ノ至ニ候元來學問之儀ハ人民一日モ致ク可ラサ  
ル事ニ甘折角勉勵罷在候生徒空敷爲引拂候而ハ  
進歩之妨ニモ可相成就テ者追テ一定ノ學制モ布  
行可相成候得共夫レ迄ノ處ハ先從前之通相心得  
修行爲致候様乍去廢藩前ヨリ引續修學爲致置候  
分者姓名取調可差出右以後差出候節ハ窺之上可  
取計事

辛未

九月

文  
部  
省

には猪子清というすぐれた家老があらわれ、藩を一つにまとめて難局を乗り切った。前出の河本は、「(猪子) 清といえる人は、実に人格上立派な人で、対話も実に高尚で、心持の好き人であった」と語っている。<sup>(23)</sup>『豊岡誌』には、猪子について「学殖富胆、才大識高、その為す所、常に人意の表に出づ。(中略) 後・大参事に任ぜらる、心を用いて後進を開導し、もってその材を成し、武を尚び文を右にし、銳意進取、弊習一洗、綱紀大いに張る」と書かれている。<sup>(24)</sup>これによると、猪子はその人となりが進歩的、あるいは革新的であったことがうかがえる。維新前後、猪子はとくに育英に力をそそぎ、才能ある若者をつぎつぎに藩費遊学生として江戸、東京に送り出した。彼こそ、豊岡藩士の教育分野での活躍の最大の功労者であろう。

つぎに幕末・明治初年の豊岡藩と藩遊学生の動静を詳しく見てみたい。ここに創設されたばかりの文部省が、明治四年九月、各府県宛に出した通達がある。(第一図 文部省通達) その要旨は、「今回廃藩になったため、従来の藩費遊学生を引き上げさせている藩もあるようだが、せっかくの勉学を中断させるのは不都合である。追って新しい学制も発布するので、それまでは以前と同じように修学をつづけさせるように。ついては、廃藩後も引き続き遊学させる者の姓名を調査のうえ差し出すように」との内容である。これに対する豊岡藩の回答の控えと思われるものが、豊岡の舟木家文書の中に残っている。これは明治四年十一月時点での藩費遊学生のリストである。(第二表 豊岡藩「遊学生徒取調帳」) このリストには十一名の豊岡藩士の名前が並んでおり、藩費の欄には当時かれらが藩から支給されていた金額が記載されている。つまり、廃藩置県が明治四年七月に断行された後も、しばらくの間、旧豊岡藩は旧藩士たちに学費を支給し続けていたのである。では、藩はかれらに何を学ばせようとしたのか。十一人の内訳をみると、英学四人、仏学三人、漢学二人、洋算一人、医学一人となっている。学問の趨勢がどちらに向かっていても安全なように配分してある。では、かれらの遊学先はどこであったか。これについてはリストにのっていないので個別に調べてみると、六人が慶應義塾、二人が大学南校、二人が村上英俊の達理堂、一人が安井息軒、三人が不明である。一人がいくつもの学塾に入門するので合計が十一人にならないが、だいたいの様子はこれでうかがえる。つまりかれら遊学生の半数は、慶應義塾に入門したのである。この十一人が豊岡を出た日付はバラバラであるが、東京にやってきた日付を見ると大ざっぱに、明治二年八月に上京した第一陣四名(浜尾、村尾、吉村、高階)と、同三年初旬に上京したと思われる第二陣(小林、神谷、岡、久保田貫一)とに分けることができる。(高階は上記のリストに載っていない。恐らく私費遊学生であったと思われる。後に述べるように、彼も第一陣の他の三名と一緒に、明治二年九月一日慶應義塾へ入塾する。)ではつぎに第一陣四名の動きを追ってみ

第二表 「遊学生徒取調帳」

明治四年十一月 元豊岡果

氏 名	族	修学地	修学科	番 費	修学開始期	修 学 所
濱 (浜) 尾新	士	東京	仏学	六両三分	明治一年六月	慶應義塾、達理堂、大学南校
村尾真一	士	東京	英学	六両三分 (当時、なし)	慶応三年四月	慶應義塾
小林源八郎	士	東京	漢学	?	明治三年一月	安井急軒
神矢肅一郎	士	東京	英学	二両 (当時、四)	明治三年一月	慶應義塾、東京師範学校
岡省三	士	東京	仏学	四両 (他に留守分三)	明治三年一月	?
久保田貫一郎	士	東京	英学	四両 (他に留守分)	明治三年一月	慶應義塾
和田有	士	西京	漢学	四両	明治三年二月	?
富永元庵	士	東京	洋算	四両 (当時、なし)	明治二年三月	達理堂、慶應義塾
尾藤 (沖野) 忠雄	士	東京	仏学	八両	明治三年十一月	大学南校 (貢進生)
岸田泰蔵	士	東京	医学	四両 (当時、なし)	明治二年三月	?
吉村寅太郎	卒	東京	英学	六両 (明治四年十月、一年分二石)	明治二年七月	慶應義塾

注

1. 豊岡市の「舟木(直光)家文書」による。『豊岡市史』下巻(1987)770頁も参考にした。
2. 修学所欄は原史料にはない。この欄は、『慶應義塾入社帳』第1巻(1986)、瀧田貞治『仏学始祖村上英俊』上巻(1934)、『第一大学区第一番中学一覽表(明治6年3月)』、『東京開成学校一覽(明治8年2月)』等により調査のうえ追加した。
3. 藩費支給額は月額。修学開始期とは、正確には藩費用支給開始期。(宿南保『浜尾新』(1992)57頁)

よう。

前出の「遊学生徒取調帳」によると、豊岡藩遊学生第一陣のなかで最初に豊岡を出たのは村尾真一である。彼は慶応三年四月から藩費の支給を受けている。そのあと浜尾、吉村、高階等がつぎつぎに郷里豊岡を発ったものと思われる。彼らは豊岡を出ると八鹿、養父とぬけて、和田山から今日の播但線のコースに沿って南下し、日本海に注ぐ円山川と播磨灘に注ぐ市川の分水嶺である生野の峠を越えて姫路に出、そこから海を右手に眺めながら京阪神方面に向かったものと思われる（これは維新期における豊岡藩の大名行列のコースである）。

一方江戸では、慶応四年（一八六八）四月、江戸城の無血開城が断行され、同五月、官軍が上野で彰義隊を破る。ここに、東北地方ではまだ戦闘がつづいてはいたが、江戸は一応落ちつきを取りもどす。七月、江戸は東京と改称され、九月、慶応は明治と改元される。翌明治二年三月、天皇は京都から東京に移り、それに伴って各藩主にも東京参集の命令が下される。豊岡藩主京極高厚も猪子以下十八人の共をつれて上京し、藩の運命を決する版籍奉還の審議の行方を見まもる。このころ、バラバラに国元を出ていた豊岡藩遊学生第一陣中の浜尾、高階、吉村の三名は、大阪にある何礼之の瓊江塾の後身、大阪洋学校に集まり待機している。彼らはそこで東京の情勢が落ちつくのを待っていたのである。ところで、大阪洋学校時代の浜尾について、つぎのような証言がある。

浜尾は今日温厚円満の君子人に成り済ましているけれども、その怒れる双肩にも面影を留めている通り、当時の彼はすこぶる剛情我慢の強き、圭角稜々たる青年であった。而して強情我慢の強きだけに、勉強することまた中々勉強し、翌日の課業の下調べなど、たとい徹夜しても必ずやっていくという風であったから、学業の成績は常に上等であった。<sup>27</sup>

猪子は浜尾のこのような忍耐強い面を評価し、彼を藩遊学生第一陣に加えたのであろう。

東京では明治二年六月二十日、ようやく京極高厚に知藩事任命の辞令が下り藩の安泰が保証された。豊岡藩邸は喜びにわきかえる。翌月、高厚は猪子をはじめとする江戸藩邸の藩士一同に見送られ、馬車で横浜に向かう。高厚一行はそこから船に乗り、七月二十三日の夕方、神戸港に着き兵庫で宿泊、二十五日豊岡に向かつて出発する。大阪で待機していた遊学生第一陣は、七月二十四日神戸で、帰国途上の藩主一行に面会し東京の様子を聞く。そして八月、藩の存続を確認した彼らは四人そろって、藩主と入れ替わりに神戸から船で上京する。一行中の吉村寅太郎は、後に当時をつぎのように回想している。

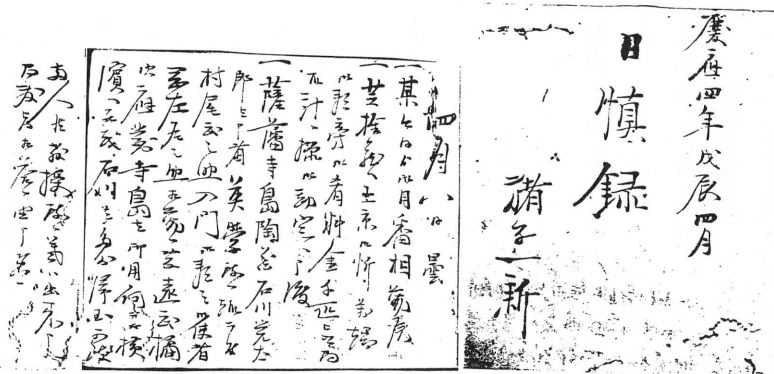
村尾真一という人がある。この人は私と同年だが、戊辰の年、京都まで帰っていたところへ往って、先達になって、西洋学を教えてもらった。そのころは東京は片付いてたが、奥羽征伐で、ゴタゴタしていたころです。それから京都で、医者のところへ往って、蘭学の手ほどきをしてもらった。ぶらぶらしているうちに秋になった。ちょうどその頃、何（礼之）先生が、洋学所（官立）を起こされたときいて、大阪に往きました。明治二年の……六月には、藩主が帰国の途上海路神戸に寄港せられたので、東京の様子もわかり、村尾から様々のことを聞きました。——蛮書取調所（後に開成所）や、その役人をしている福沢というものが塾を開いていることをききました。

何先生の塾は、随分乱暴書生の居た所で、村尾、浜尾、高階と自分と四人で、蒸気船で東京へ来るとき、高げたで甲板を闊歩したことを覚えています。船賃は、太政官札で十五両だったと覚えています。<sup>28</sup>「（一）内

この回想によると、かれら遊学生第一陣四名の中で最初に洋学に志し、他のメンバーに東京の福沢諭吉の塾について教えたのは村尾真一である。前述したように、彼は「遊学生徒取調帳」に載った十一名中もつとも早く国を出て、修学を開始した。国を出た後、村尾がどこで過ごしたのかは明らかではないが、江戸に向かった可能性が高い。慶応四年、戊辰戦争がはじまると豊岡藩には京都の桂御所警固の朝命が下る。これに従い、豊岡藩兵が京都に入っていたのが同年一月十四日であった。おそらく村尾はこの警固の一隊に加わるため、「京都まで帰って」きたものと思われる。吉村が村尾から西洋学を学んだのはこの時のことであろう。村尾は、その後、鳥羽伏見の戦いが一段落すると東京に向かい、そのまま明治元年は東京で過ごしたものと考えられる。（このことは、後にとりあげる猪子の日記「日慎録」の記述から推測される。）明治元年、村尾は東京で英学の師を探していた。村尾が福沢諭吉の慶應義塾のことを聞き知ったのはおそらくこの時であろう。そして明治二年六月、かれは藩主と前後して神戸までもどり、そこに待機していた遊学生三名を引き連れ、再び東京に向かったものと思われる。さて、吉村の回想の中に「村尾から様々のことを聞きました。——蜜書取調所や、その役人をしている福沢というものが塾を開いていることをききました」とあるのは、この折りに村尾が三人に上京後の予定を伝えたこととてよいであろう。事実かれらは上京後ただちに、全員そろって慶應義塾に入塾している。福沢は元治元年（一八六四）以来、蕃書調所ではないが幕府の外国奉行支配翻訳御用となっていた。村尾の話はこのことを指しているのであろう。以上により、豊岡藩遊学生第一陣四名は、はじめから慶應義塾を目指して上京したと考えられる。村尾が彼の一存で全員を慶應義塾に入塾させたとは考えられない。よって第一陣の行動はすべて、豊岡藩の意志によるも

第二図 猪子清「日慎録」(慶應四年四月八日)

兵庫県公館県政資料室蔵



の、おそらく猪子の指示によるものと考えられるのである。では豊岡藩はなぜ遊学先に慶應義塾を選んだのだろうか。

豊岡藩士村尾真一の英学修業に関するもっとも古い記録は、猪子の日記「日慎録」に見られる。その慶應四年四月八日の項に、次のような記事が載っている。(第二図 猪子清「日慎録」)

四月八日 曇

一 薩藩寺島陶蔵石川寛太

郎と申者英学致候趣ニ付

村尾武之助入門御頼ミ御使者

岡左右之助相勤候處遠武橋

次應對寺島は御用向ニテ横

濱へ罷越石川は多分帰国可致

兩人共教授致候義ハ出来申

間數旨相答候由申達候<sup>30</sup>

この日記の内容は、「薩摩藩の寺島陶蔵、石川寛太郎という者が英学を修めているとのことであつたので、(豊



岡藩の)岡左右之助(後の岡毅)が使者として村尾武之助の入門を頼んだが、(薩摩藩の)遠武橋次が応対に出て、寺島は幕府の仕事で横浜に行っており、石川は国元へ帰国するゆえ、二人とも英字の教授は出来ないとのことであつた」との意味であろう。ここに出てくる寺島陶蔵は寺島宗則、村尾武之助は村尾真一を指している。また石川寛太郎とは石河確太郎のことであろう。寺島宗則は天保三年(一八三二)薩摩藩郷士の子に生まれ、蘭方医学を学び藩医となる。後に幕府の蕃書調所に出仕し、文久元年(一八六一)幕府の遣欧使節には福沢諭吉らとともに通訳兼医師として参加した。明治元年三月、かれは横浜裁判所在勤となり、六月には神奈川府判事となつてい<sup>31</sup>る。このような事情で、寺島は当時江戸にはいなかったのである。石川確太郎も薩摩藩の出身で、蘭学を学び後に洋書を翻訳し、薩摩藩主島津斉彬に仕え、同藩の反射炉築造、鹿児島紡績所創設など主として国元で活躍した<sup>32</sup>た。

この日記の記述からわかることは、豊岡藩が藩士村尾になによりも英学を学ばせようとしたことである。おそらく、当時江戸にいた猪子は英学の将来性に目をつけ、若手の藩士中できたとくに学問のできた村尾にその修学を命じたのであろう。このことから、村尾は明治元年に江戸にいたと考えられるのである。さて、薩摩藩に断られた猪子と村尾は、それに代わる英学の師を探したにちがいない。そこで出会ったのが福沢諭吉であつたと思われる。残念ながら、豊岡藩と福沢諭吉の最初の出会いに関する記事は、現存する「日慎録」には見当たらない。そこで、このところは想像するよりほかない。豊岡藩が福沢諭吉の塾を知つたのは、あるいは福沢をよく知つていた寺島の推薦によるものかもしれない。また、慶応四年四月に慶應義塾と名を改め近代私塾として再出発した福沢の塾は、命名とともに「慶應義塾之記」を起草し、塾の建学精神をひろく世間に宣伝するとともに、有意の青年の入塾を促していた。この「慶應義塾之記」は起草直後、『内外新報』(慶応四年四月十八日号)紙上にも全文が転載さ

れている。<sup>33</sup> 猪子や村尾はこれを読み慶應義塾に注目したのかもしれない。

ここで豊岡藩遊学生の一陣、浜尾、村尾、吉村、高階の四名を分析しておこう。上京した年の四人の平均年齢は二十三歳である。また、村尾と浜尾とは江戸定府の家柄であり、東京の地理に明るい者が選ばれたことがわかる。つぎに注目すべきは、高階を除く三人の身分が低いことである。豊岡藩の士族階級は、上中下の三階級に別れていて、それぞれ、住居の様式から、衣服、面会の際のあいさつの仕方といったるまで細かく決められていたといわれる。<sup>34</sup> 明治三年に作られた「固有席次」と題する豊岡藩士の名簿によると、浜尾は全藩士百五人中七十八番目、村尾は百一番目で二人とも下士に属する。吉村は足輕のため載っていない。<sup>35</sup>（高階は三十八番目で中士であるが、かれは前述したように私費遊学生であつたと思われる。）なぜ、彼らのような下級藩士が藩費遊学生に選ばれたのだろうか。豊岡藩出身の河本重次郎は、後に浜尾の上京について「兵学研究ということで猪子清氏の推挙で出京されしが、浜尾氏栄達の本なりとす」と語っている。<sup>36</sup> また豊岡出身の政治家古島一雄も、「当時英学修業の為多数の藩子弟より、特に少祿なる浜尾先生と吉村寅太郎氏を選拔せられた猪子さんの眼識が、即ち先生（浜尾）が江戸留学の発端でありました」と語っている。<sup>37</sup> つまり閉鎖的封建的な豊岡で、彼らが遊学生第一陣に選ばれた背後には、強く猪子の意志が働いていたものと考えられる。

猪子は遊学生の選抜にあたって、遊学先で信頼される誠実な努力家を選んだものと思われる。遊学生第一陣の任務は、後につづく豊岡藩士のために、東京に橋頭堡を築くことであつたのであろう。事実、村尾と吉村は福沢に信頼され慶應義塾の教師になり、浜尾は大学南校——東京大学で出世し、後に同大学の総長になる。第一陣に続く同藩遊学生は彼らを頼り、慶應義塾と東京大学へつぎつぎとやってくる。豊岡藩遊学生第一陣は、猪子の期待に応えたのである。

## 二、草創期の慶應義塾

### ①慶應義塾の創設

慶應義塾の出発点が、安政五年（一八五八）に福沢諭吉が中津藩の命により江戸藩邸内で始めた蘭学塾であることはよく知られている。ただしこの時、福沢は塾をはじめることについて、かならずしも積極的ではなかった。そのことは同年十一月に書かれた福沢の書簡に「……其後御国元の都合如何に御座候哉。事に依り御出府も可相成哉。夫のみ相待居申候。私も何れ三、四年は滞遊仕候様可相成、其内一度は掛御目度事と存候」と書かれていることに示されている。この書簡は宛名が不明であるが、その内容から緒方塾の学友宛であろうと考えられる。ここに「三、四年は滞遊」とあるように、福沢は江戸に長く滞在するつもりはなく、したがって江戸藩邸内の蘭学塾は「ほんの当座の腰掛け仕事」くらいのつもりでいたと推察されるのである。<sup>38</sup>ところがそれから十年後の慶応四年（一八六八）には、教科書、土地、建物を私財を投じて購入し、人材を中津から連れ出し、私塾慶應義塾を創設した。つまりこの十年間に、福沢は受動から能動へと変化したのである。この変化に注目したのは中山一義教授であった。ではその十年間に何があったのか。三度の洋行、これである。この洋行一つ一つの意義もまた、同教授により命名されている。つまり、第一回目のアメリカ行を「驚嘆の洗礼」、第二回目のヨーロッパ行を「調査探索」、第三回目のアメリカ行を「私塾創設」と。<sup>40</sup>

福沢の第一回目の洋行は、万延元年（一八六〇）幕府の軍艦咸臨丸に軍艦奉行木村摂津守の従者として乗り込

み、アメリカ西海岸サンフランシスコに行った。このサンフランシスコで福沢は「驚嘆の洗礼」を受けた。馬車を見て驚き、じゅうたんの上を人が歩くのを見て驚き、シャンパンの音に驚き、女尊男卑の風俗に驚き、鉄の多いことに驚き、物価の高さに驚き、アメリカ人がワシントンの子孫の消息に無関心なことに驚いた。福沢は西洋文明に心底驚いたのである。

第二回目の洋行は、文久二年（一八六二）幕府遣欧使節に随行してヨーロッパ各国を歴訪する旅で、福沢は翻訳方として参加した。この洋行は福沢にとって、西洋文明の根源を「調査探索」する旅であった。その調査探索における福沢の苦勞は『福翁自伝』に詳しい。そして、福沢が新しい教育による国民改造の必要性を強く意識したのは、この第二回目のヨーロッパ旅行の最中であつたろう。そのことは、つぎのよく知られている福沢の島津祐太郎宛書簡により知ることができる。島津は中津藩の先輩であり、また福沢の理解者でもある。

先ず当今の急務は富国強兵に御座候。富国強兵の本は人物を養育すること専務に存じ候。これまでお屋敷にて人物を引き立つるには、漢籍を読むを専務と致し来り候へども、漢籍も読みようにて実地に施し用をなし申さず……左候えば富国強兵の本、人物を養育するは、必ず漢籍を読むにもあらざることと存じられ候。<sup>11</sup>

このヨーロッパ旅行を通じて、福沢は教育を日本の運命と結び付けて考えるようになったものと思われる。これからの教育は従来の漢学ではなく、西洋の学問でなければならないと痛感したのであろう。<sup>12</sup>

さて、このヨーロッパ旅行から帰国後の元治元年（一八六四）、福沢はいったん中津に帰り、小幡兄弟をはじめとする若い中津藩士六名（小幡篤次郎、小幡仁三郎「甚三郎」、浜野丑之助「定四郎」、三輪光五郎、小幡貞次郎、服部浅

之助」を率いて江戸に戻る。この人々が、後に慶應義塾運営の中心を担っていく。慶応元年（一八六五）六月福沢塾に入塾することになる信州松代藩士立田革は、それに先立って洋学修業の志を大鳥圭介に相談したところ、「先生懇ろに英あるいは仏に若かず、英なれば鉄砲州に福沢あり、仏なれば下谷に箕作あり。之に就て学ぶべしと教えられ」たと語っている。当時すでに福沢諭吉の名が広く知られていたことがわかる。<sup>43</sup>

また、福沢は慶応二年（一八六六）の冬、それまでの洋行の成果をまとめて『西洋事情』初編三冊を刊行した。この書は福沢の著作中で最初のベストセラーとなり、彼の著述家としての名は全国に知られるようになる。と同時に、この成功により慶應義塾創設のための経済的基盤が整った。<sup>44</sup>

第三回目の洋行は、慶応三年（一八六七）、幕府の軍艦受け取り委員の随員として再びアメリカに向かった。この時は、ワシントン、ニューヨークなど、東海岸の諸都市にまで行った。当時福沢塾で修業中であった森春吉はつぎのように語っている。

（慶応三年）正月先生第三回の洋行（米国へ）ありて、余等塾生はこの中屋敷の門前までお見送り申す。その中に立田秀英（革）氏もあり。同氏は当時塾中の議論家なりしが、先生別れに臨み、立田さん「留守中はお静かに」と言われてご出発なされたり。先生この行において英書をたくさん購入帰朝せられしが、義塾発展の基礎なりと思う。<sup>45</sup>「（一）内は原注」

森も語るように、この洋行の目的は私塾創設の準備用に、できるだけ多くの英書を購入することにあった。福沢自身もこのアメリカ行をつぎのように回想している。

慶応三年の春、諭吉はまたアメリカに航し、この度は前に比すれば資本も豊にして、多分に英書を買入れ、一私塾生徒の用に供して不自由なきほどのものを携え帰りたり。すなわちその書類は辞書のほか、英氏の経済論、クワッケンボスの窮理書、文典、米国史、バーレーおよびグードリチの万国史、英国史など、いずれもみな古今いまだかつて目撃せざるところの珍書にして、就中その経済論のごとき、初めはこれを読むことすこぶる困難なりしかども、再三再四復読してようやくその義を解すにおよび、毎章毎句、耳目に新ならざるものなく、絶妙の文法、新奇の議論、心魂を驚破して食を忘るるに至れり。

同時にまた英氏の修身論を得てこれを研究し、はじめて仁義五常のほかにもまた道德の教あるを知り、この時に諭吉はまさにチャンブル氏エコノミー（西洋事情外編原書）の翻訳に従事し、社中小幡君兄弟をはじめとして数名の同志、夜となく日となく、これを談じ彼を話して余念あることなし。<sup>46</sup>「（一）内は原注」

福沢が第三回目の洋行（アメリカ行）から帰国したのは慶応三年六月末である。同年十二月二十五日、福沢は新銭座の有馬家中屋敷を三百五十五両で購入し、翌慶応四年四月、この地に慶應義塾を創立する。上の引用文にある、アメリカで購入した英書に「食を忘るる」ほど熱中し、「社中小幡君兄弟をはじめとして数名の同志、夜となく日となく、これを談じ彼を話して余念あることなし」とは、まさに慶應義塾創設期における福沢と義塾の主だった者たちの様子であろう。

このような準備期間を経て慶応四年四月、それまでの福沢塾はあらたに慶應義塾として出発した。

## ②草創期の慶應義塾の様子

さて、江戸末期の福沢塾が明治元年に慶應義塾に衣替えするのと前後して、塾の気風が一変したと多くの人が証言している。以下は莊田平五郎の回想である。よく引用される長文ではあるが、草創期の慶應義塾を知ろうとで欠くことのできない証言であるので、ここにとりあげたい。

私が慶応三年に江戸に出て来たころは、塾は鉄砲洲にあつて、私塾の中で一番盛んであるということでしたが、なにぶん福沢塾は不規律乱暴であるという評判なので、青地信敬という人が根岸に開いていた塾に入りました。その内、藩命で一旦国に帰りましたが、帰国の際新錢座のお宅に上つて一度先生にお目にかかりました。それから明治三年に再び出京して、今度は慶應義塾に入ろうと思つて新錢座の塾に参りますと、根岸の塾で知り合いになつた阿部泰藏さんがそこにいたので入塾の手続きを聞いたたりいろいろの話をしましたが、今日は休日でこれから二三人で散歩に出かけようというところだから、一緒に行かないかというので、亀井戸の梅見に参りました。その時私はまだ大小を差しておりましたが、阿部さんは丸腰でした。そしていかにも質素な服装で、裾の方が破れた呉組の羽織を着ていました。半日ほど散歩してどこかで夕飯を食ふて帰って来ましたが、この時私が大いに感じたのは、阿部さんも私も血氣盛りの年でありましたから、根岸の塾に居たときには、一緒に女を相手に酒を飲んだりなにかして随分遊んだこともありました。ところがその阿部さんが服装容体などには一向頓着しない。また同行の塾生も途中で美人などに遇つても見向くものはない。半日のあいだ、いろいろの話をして歩き、時刻一緒に飯を食べましたが、一言も婦人のことなどという者が無い。二年も経たないのに阿部さんは全く別人のようになっていました。それから入塾してみると、茶屋

料理屋などに行く者は塾内でも評判が悪いというような風で、鉄砲洲時代の世間の評判とは全く反対になっていました。畢竟先生の人間のキャラクターを直そうという熱心なご尽力の結果であろうと思います。<sup>47</sup>

『福沢諭吉伝』には、鉄砲洲時代の福沢塾には「入塾とは名のみで教場には出ず終日なにか奔走して夜ばかり寄宿するような恰も政情視察を事とする諸藩の有志家など」がおり、「純然たる学生ばかりではなかった」と書かれている。<sup>48</sup>世相が塾の風紀にも反映していたのだろう。それを改めようと、福沢と共に塾風刷新の先頭に立ったのは、明治初年塾長の任にあった小幡甚三郎であった。<sup>49</sup>以下は明治二年九月三日、つまり豊岡藩士四人より二日遅れて義塾に入塾した須田辰次郎の回想である。

慶応四年、芝新銭座に塾を移し、教務は（小幡）篤次郎先生、管理は（小幡）甚三郎氏教授のかたわら専らその任にあたり規則を定めて厳重に制統するにはあらざれども、自ら身をもつて率い維新後諸藩士の多く入学する際にはすでに一種の塾風を成し、兵乱後の士気も為に塾化し曾て乱暴の沙汰なかりしという。当時書生といえはほとんど乱暴者の異名の如き時代に、慶應義塾生はいわゆる文明学生の模範を以て目せられ、爾来設立の官公私立の学校ほとんどいづれもその範を慶應義塾に取り、多くは教員もしくは監事を義塾より招聘し塾風を移さしむるの勢いを成したるは、もとより福沢先生の指導に依りたるに相違なきも甚三郎氏の管理方法その宜しきを得たるに帰せずんばあるべからず。<sup>50</sup>

須田は塾風刷新に努力する甚三郎から強い印象を受けたものと思われる。『慶應義塾百年史』にあるように、「新



錢座時代の塾風は、それ以前の乱暴な塾風とは打って変わった、当時としては規則正しい、しかも近代的な学生生活が営まれようとし始めており、洋学志望の青年に、大きな自負心を養わせる上にあずかって力があつた<sup>51</sup>ものと思われる。

草創期の慶應義塾の学習法については、明治二年八月に著された「慶應義塾新議」につきのように記されている。

義塾読書の順序は大略左のごとし。社中に入りまず西洋のいろはを覚え、理学初歩か又は文法書を読む。この間三カ月を費す。三カ月終わって地理書または窮理書一冊を読む。この間六カ月を費す。六カ月終わって歴史一冊を読む。この間六カ月を費す。右いずれも素読の教えを受く。これにて大抵洋書を読む味も分り、字引を用い先進の人へ不審を聞けば、銘々思い思いの書をも試に読むべく、むつかしき書の講義を聞いても随分その意味を解すべし。まずこれを独学の手始めとす。かつまた会読は入社後三、四カ月にて始む。これにて大いに読書の力を増すべし。右のごとく三カ月と六カ月とまた六カ月にて一年三月なり<sup>52</sup>。

この「慶應義塾新議」から、当時の義塾の授業は、全体で一年三カ月の素読による速成で、その後は「銘々思い思いの書をも試に読む」べしという、まったくの「個人本位」のものであったことがわかる<sup>53</sup>。また、学生は入塾三、四カ月後から素読と並行して会読へ参加する。これにより読書の力をつけることができる。また勉強がある程度進んだ段階で、希望者は講義の聴講が許された。以上、当時の慶應義塾の授業形態は素読、会読、講義の

三つで、その目的は「独学の手初め」を伝授することにあつたことがわかる。

明治二年八月に作られた『芝新錢座慶應義塾之記』中の日課によると、講義は福沢諭吉の「ウェーランド氏修身論講義」、小幡篤次郎の「クワッケンボス氏合衆国歴史講義」の二つで、福沢の講義は水曜日と土曜日の週二回、小幡篤次郎の講義は日曜日を除く毎日行われた。会説は小幡篤次郎の「ウェーランド氏経済書会説」、小幡甚三郎の「ピンノック氏仏国歴史会説」、馬場辰猪の「ハイススクール地理書会説」など週に全部で十二コマあり、その他十以上の素読のクラスが毎日あつたことがうかがえる。<sup>54</sup>

素読とは、「書物の意味を解釈しようとせず、ただ文章の読み方だけを声を立てて習うこと」である。<sup>55</sup> 明治初年に塾生であつた須田辰次郎は、「素読は五等の方々の受持ちにて一人の教師が字指を以て一々字を突きて教えたり。まず読み方（発音）を教え、後に訳語（意味）を教え二、三回繰り返し生徒が自ら読み得るに至りて止む」と語っている。<sup>56</sup> これによると、意味も多少は教えたようだが、中心は音読の教授にあつた。会説とは、「多人数が寄り集まって、書物を読みながらその意味を講義し、互いに質問し合つて研究をすること」である。<sup>57</sup> おそらく義塾における素読会説は、緒方洪庵の適塾における蘭学の学習法をそのまま踏襲したものであろう。

草創期の慶應義塾における講義の様子を「元治慶応の江戸時代から、開成所や算作の塾に居て、明治初年に福沢塾に入門した」白木生（ペンネーム）はつぎのように語っている。

ついでに一言するは、新錢座時代における福沢先生のギゾー文明史の講義である。とくに同史封建制度の講義は、非常に面白いといふ評判であつた。先生が同制度を講ぜらるるときは、日本の封建制度につき、生きたる例証を引き、殿様の馬鹿らしき有様やら、三太夫の不都合やら、一々これを日本封建に適用して、日

本封建を罵倒せられたるその状は、あたかも今日のいわゆる最も激烈痛快なる政談演説のやうであつたらしい。<sup>(58)</sup>

創設当時の慶應義塾の学生の特徴として、服装や言葉遣いにおける平民主義を指摘することができであろう。服装について須田辰次郎は、「福沢先生、小幡三兄弟は平民で、故らに頭髮衣服すべて商人の風をされて、縞の羽織にパッチ穿きというような姿をしておられ、率先して袴を脱ぎ廃刀したため、塾生もそれにならい「今日のいわゆる兵児帯でいる者は一人もない。角帯というものが慶應義塾の一種の徽章のようになっておつた」と語っている。<sup>(59)</sup> 廃刀は塾生のあいだにも広がった。つぎのような話が伝えられている。

（福沢先生が）「文明開化の世の中に、ありがたそうに凶器を腰にしている奴は馬鹿だ。その刀の長いほど大馬鹿であるから、武家の刀はこれを名づけて馬鹿メートルというがよろう」などと気炎を吐いて廃刀を力説されたので、塾中ではおいおい廃刀者ができてきた。ある日、小幡甚三郎ほか二、三人の塾生が丸腰で散歩していると、どこかの壮士に見とがめられ、お前達は武家でありながらなぜ大小を差していないかと議論を吹きかけられたことがある。<sup>(60)</sup>

言葉遣いについては、白木生がつぎのように語っている。

自由平等の理想 新銭座時代すでに実行されていたようだ。ある時小幡甚三郎さんが、長屋の窓下にいた雪

駄直しに履物を直させつつあったが、その時小幡氏はアナタという敬称で、雪駄直しを呼び、かつ「こうして下さい」「そうして下さい」と下さいなる敬語を使われた。これには我ら少年は驚いた。我々は武士の家に生まれたるがゆえに、商人や百姓以下を呼ぶに、貴様等とか、手前達とか、その方共と言ひ、精々ていねいにしたところで、御前と言う位である。しかるに甚さん（小幡氏兄弟在塾せられたるを以て、令兄を篤さん、令弟を甚さんと言うが普通であつた）は、雪駄直し（中略）と平等の応接をしているのである。我々の驚くも無理はない。我々は平等主義など言うものを、それまでは、夢にも見聞したことがない。そこで先輩から段々話を聞くと、自由思想や平等主義が、塾内に充満している。<sup>61</sup>「（）内は原注」

ていねいな言葉遣いに現れている義塾の平等主義は、なによりも福沢自身が民主的な人間で、その感化が塾生全体に及んでいたと考えるべきであろう。以下は須田辰次郎の回想である。

当時塾にて先生と言へば必ず福沢先生を指して言える敬称なり。されば小幡先生のごときも篤さん、甚さん、阿部さん、永島さんと称して人によりて敬称の区別なく皆さん付なり。ここに驚きたるは、先生がその令閔令息方と呼ばれるにもみなさん付なることなりき。余の郷里の慣習上呼び捨てに慣れたる耳にはすこぶる奇異の感ありき。予等のごときも辰さん、彦さん（中上川氏の事なり）と呼ばれ、ほとんどことごとくさん付なり。これ彼のequalityを遺憾なく發揮せられたところなるべし。<sup>62</sup>「（）内は原注」

もう一つ、草創期の慶應義塾の特色として、その変則的発音を逸することもできない。明治五年童子局に入塾し

た波多野承五郎はつぎのように語っている。

### 変テコな英語

その頃の塾の英語は、よほど変テコであった。それはローマ字で綴った英語を、文字通りに読んだからである。例えば *People* を「ペオプル」、*Vegetable* を「ベゲテブル」と発音するという猛烈なものもあった。さもなくとも、和蘭流の発音法を英語に適用して、フランクリンをフランキンといい、バターをブットルという具合であった。畢竟、英語の教師を雇い入れずに、自己流の読み方をしていたからだ。<sup>63</sup>

以上、草創期の慶應義塾は、当時としては国内でもっとも整備された洋学カリキュラムをもった日本最初の近代的教育機関であった。と同時に、当時もっとも整った校風を備えた学塾でもあった。義塾の創立者福沢は講義の中で封建制度を批判し、刀を馬鹿メートルと呼び率先して廃刀し、自ら一民間人として国民とともに歩む姿勢を示した。塾生は福沢にならい平民主義を唱え、互いを「さんづけ」で呼び合い、武士の特権にとられず町人姿をして、ただ進んだ西洋の文明を学ぶことに生きがいを見いだし、それを誇りとした。豊岡藩遊学生四名は、このような草創期の慶應義塾に入塾したのである。

### ③ 豊岡藩士の入塾

神戸から横浜に着いた豊岡藩遊学生第一陣の四名はその後どのように行動しただろうか。ふたたび吉村の回想である。

当時の横浜は、漁村がようやく開けたばかりで、居留地のでき始めて、四方は兵卒が固めていました。午後の四時に着いて、段々取調を受けて、上陸はできたものの、泊まることは許されず程ヶ谷、神奈川と歩いて、東京に向かいました。神奈川で、腹が空るので、屋台店で鮓を食って、ついにその晩は泊まって、翌朝はやく東京に向かいました。(中略)それから麴町の平河天神内の屋敷に着いて、慶應義塾に入塾を申し込みました。<sup>64</sup>

遊学生たちは上京すると、まず麴町の豊岡藩邸に出頭し報告を済ますと、新銭座の慶應義塾に向かった。『慶應義塾入社帳』によると、浜尾新、村尾真一、吉村寅太郎、高階守人の四名はそろって、明治二年九月一日に義塾に入塾している。<sup>65</sup>身元保証人は豊岡藩の公用人、下村彦三である。(第三回 慶應義塾入社帳)

吉村の回想がつづく。

ところが新銭座が狭くてはいれない。汐止の中津屋敷に設けてある出張所に通ってこいといわれました。四人で下宿して、汐止の奥平の屋敷に通いました。間もなく新銭座の方の都合がついたので、四人とも移って、一生懸命に勉強しました。浜尾は、陸軍に入るため仏語を研究する必要上、本所の村上(英俊)塾に転じました。その頃は誰でも勉強したものです。

冬十二月、はじめて小幡さんの世話で、石油一缶買ってきて、ビール壺に分けてもらって、ランプを買って各室につけました。臭かったが、行灯よりはたしかに明るかった。<sup>66</sup>「( )内は原注」

第三回 慶應義塾入社帳 (明治二年九月)

福澤研究センター編『慶應義塾入社帳』第1巻 277頁

本人姓名		高階亨	
生國	但馬	豊岡	
住所	京極從五位	高階八右衛門	
主人姓名 <small>己子千者ハ領主ノ姓名ハ</small>	京極從五位	高階八右衛門	
父或兄弟姓名 <small>己子千者ハ領主ノ姓名ハ</small>	京極從五位	高階八右衛門	
年齢	廿七歳		
社中入年月日	己九月朔		
入塾證今姓名印	下村芳三		

本人姓名		村尾武助	
生國	但馬	豊岡	
住所	京極從五位	京極從五位	
主人姓名 <small>己子千者ハ領主ノ姓名ハ</small>	京極從五位	京極從五位	
父或兄弟姓名 <small>己子千者ハ領主ノ姓名ハ</small>	京極從五位	京極從五位	
年齢	廿二歳		
社中入年月日	己五月朔		
入塾證今姓名印	下村芳三		

本人姓名		土村富太郎	
生國	但馬	豊岡	
住所	京極從五位	京極從五位	
主人姓名 <small>己子千者ハ領主ノ姓名ハ</small>	京極從五位	京極從五位	
父或兄弟姓名 <small>己子千者ハ領主ノ姓名ハ</small>	京極從五位	京極從五位	
年齢	廿二歳		
社中入年月日	己九月朔		
入塾證今姓名印	下村芳三		

本人姓名		濱戸新	
生國	但馬	豊岡	
住所	京極從五位	京極從五位	
主人姓名 <small>己子千者ハ領主ノ姓名ハ</small>	京極從五位	京極從五位	
父或兄弟姓名 <small>己子千者ハ領主ノ姓名ハ</small>	京極從五位	京極從五位	
年齢	廿一歳		
社中入年月日	己九月朔		
入塾證今姓名印	下村芳三		

前に述べたように慶應義塾は慶応四年（明治元年）四月、新銭座の地に開学した。『百年史』には、その後入塾者がふえ新銭座の校舎がいっぱいになったため、明治二年八月、中津藩上屋敷の長屋を借りて汐留出張所とし、初学の者をここに集め、本塾から毎日出張授業をすることとした、とある。<sup>67</sup>明治二年に発行された『慶應義塾新議』には「この度出張の講堂（汐留出張所）は講書教授の場所のみにて、眠食の部屋なし。遠国より来る人は近所へ旅宿すべし。随分手軽に滞留すべき宿もあるべし」と記されている。<sup>68</sup>豊岡藩士四名の場合も汐留近辺に下宿をもとめ、そこから出張所に通ったものと思われる。

豊岡藩士とおなじ明治二年九月に入塾した須田辰次郎の回想は、当時の義塾内外の状況を次のように伝えている。

私が初めて慶應義塾に入学を致したのは今よりほとんど五昔、五十年近く前のことであります。明治二年の八月の末上京致しまして、すぐに同行者に連れられて新銭座の先生のお宅に出て、拝顔を得たのであります。その時先生は『世界国尽』のご起稿中でありまして、同行者にお示しになったのを私も傍で拝見致しました。九月の初旬に入塾致しましたが、当時塾は満員でありまして、寄宿することができない。よんどころなく現今通信省のあります所の汐留の奥平の屋敷から通学しておりました。（中略）

私の参りました明治二年は、奥羽の戦争も平定し、静穏になった年でございますから、秋より初冬にかけて諸藩から留学に出てきた者が大層多かったので、在来の寄宿舎のみでは到底入り切らないという所から、ついに奥平の屋敷の空長屋を借り入れ、これに修繕を加えて、二階を寄宿舎とし、階下を教室として、四五十



名くらいに素読を教ふる場にあて、塾より出教授をしてもらいました。<sup>69</sup>

明治二年、慶應義塾への入塾者は激増し、須田も新銭座の塾には入ることができず、汐留の出張所に寄宿した。戊辰戦争が一段落し東京が落ちつくのを待っていたのは豊岡藩のみではなかったのである。汐留出張所は寄宿生を置かない規則になっていたが、その後要望が強く置くことになった。<sup>70</sup>やがて新銭座の本塾が空いたので、須田も豊岡藩士四人も寄宿生としてそこに入った。

では当時の新銭座の塾の様子はどのようなものであったか。以下も須田辰次郎の回想である。

新銭座の塾というのは、五十年史にも図が出ておりますが、まことに狭いものであって、教授用具などというものはあるかないか分からぬ。当時においては日本一の学校であるといっておったその学校が、教室といっても二十畳数位の室が一つと、八畳の室が二つ、そのほかに玄関が六畳だけで、しかもその六畳は通学生（中略）の控所に兼用してあった。その六畳の室の側面に月旦評とかいう名札掛があつて、それに一から十幾等かに分けて小幡先生をはじめ塾の教員塾生に至るまでの名札が掛けてありました。<sup>71</sup>当時の人数は教員学生合わせて百人前後であつたろうと思います。しかもその百名前後の教員学生の中、その大部分はほとんど士族……であつたと思います。

豊岡藩士が入塾したところの新銭座の慶應義塾の様子は以上のものであった。ではそこでの豊岡藩士の生活はどのようなものだったのか。おそらく、他の塾生と同じように素読、会読、そして場合によっては講義にも出席し

たことだろう。吉村の回想に「間もなく新錢座の方の都合がついたので、四人とも移って、一生懸命に勉強しました。(中略)その頃は誰でも勉強したものです」とあるように、昼夜を分かたず勉学に励んだに違いない。前述した慶應義塾の日課によると、当時は福沢諭吉の「ウェーランド氏修身論」と小幡篤次郎の「クワッケンボス氏合衆国歴史」の両講義が行われていた。福沢の講義は「塾生の上級はもちろん、他の有志者に聴聞を許され」ていたといわれる。<sup>72</sup>当時の塾生、後藤牧太はこの福沢の講義について「同書には宗教に関する事あり。神に対する人の務めを説けり。ただし先生は、その点に対しては、『こういうわけのものかしらむ』というような疑の言葉を、発せられたり」と回想している。<sup>73</sup>ウェーランド著の『修身論』(Elements of Moral Science)はキリスト教の立場から書かれているので、福沢には同意しにくい部分もあったものと思われる。豊岡藩士たちも、これらの講義を聴いたことがあったかもしれない。

吉村の回想にあるように、浜尾は比較的早い時期に村上英俊の達理堂に転じたものと思われる。当時、軍事を学ぶにはフランス語が必要であった。また高階については明治二年十一月六日の猪子の記録に、「高階守人兼て福沢塾ニ寄寓ノ所、都合ニ付退塾今夕御邸へ引取候」と書かれている。<sup>74</sup>猪子は慶應義塾を福沢塾と呼んでいる。高階守人は入塾二カ月後早くも退塾し、やがて豊岡に帰国した。

浜尾と高階が去った後、慶應義塾に残ったのは村尾と吉村の二人であった。そしてその二人は、明治三年にはすでに義塾で教えはじめている。吉村は語る。

翌三年の九月か十月には、段々塾生がふえたので、わずか一年研究したばかりの私が、教えることになりました。甚さん(小幡甚三郎氏)の席——机の幅も行李の幅もきまっていた、一人前置一畳半でした——に

行くと、「塾生もふえるから、稽古する代わりに、教へてくれ」と云はれた。「有難いが、教へた経験もないし、自分たちは、まだ読む力がない」と断ると、「二社の内だから、構ふことはない。分らない点があったら、相談にあずからう」と、親切に云はれたので、引き受けました。村尾は、前から教へていたのです。教科書は、コーネルの地理書で、地理書は一番よむにやさしいから、分からぬ事は自分が教へてやると甚さんが云ってくださったので、ついに教へることになったのです。発音なんか自己流で、地名などにぶつかる、「コレコレ」と云ふばかりで、飛ばして文句だけ読んで教へた。翌年には万国史、米国史、文典なんど教へることになった。<sup>75</sup>「（）内は原注」

ここで語られているのは、草創期の慶應義塾の特徴の一つである半学半教の制である。先進生が後進生を教えた。明治三年閏十一月八日入社した栗本東明は吉村の指導を受けた一人であるが、当時をつぎのように回想している。

八日の日は新錢座の塾に行き、入社金三円を納め、小幡甚三郎さんに頼んで入社しました。（中略）文典と地理書の会読——会頭は、吉村寅太郎さん。江川塾の方で稽古しました。粗末な長屋で、下には畳が敷いてあって、六尺ばかりの長机の前に座って、会読するのです。<sup>76</sup>

吉村の教え方については、明治四年八月入塾の加藤木重教も「その頃の先生の中で、浜野定四郎、和田義郎、吉村寅太郎諸氏は、会読や試験の折、点数が緩やかでした。素読受持の若い先生には、中上川彦次郎、四谷純三郎、瀬谷鉞三郎の諸氏がありました。門野幾之進先生などは、十六七歳の青年なれば、ずいぶん癩癪持でした」と

語っている。吉村の教え方は比較的温厚であつたものと思われる。

### 三、その後の豊岡藩士

明治二年九月に慶應義塾に入塾した豊岡藩士、村尾、浜尾、吉村、高階の四名はその後どのように行動しただろうか。高階については、前述したように、同年十一月三日に早くも退塾し、豊岡に帰っている。そこで残りの三名の、その後の動きを追ってみよう。

#### ①村尾真一

村尾と吉村の二人は慶應義塾の教師になり、そのまま義塾に残った。前に述べたように、村尾は四人のなかでもっとも早く洋学を学びはじめ、またもっとも学問に向いていたと思われる。福沢も村尾に期待をかけていた。前に見たように、かれは明治二年の終わるか翌三年のはじめには、すでに義塾で教えはじめていた。その後、明治四年、慶應義塾が三田に移転することになると、村尾、吉村は小幡兄弟、荘田平五郎らと共にその主要メンバーとして活躍した。荘田の日記にはつぎのように書かれている。

正月十六日 今日より三田塾へ九番連中引つ越す。村尾氏行。

二月廿一日 今日、三田塾に引移、吉村君と予と二等なり。

三月十六日 今日、新錢座塾総体引越に付、朝八字頃より彼方に行、塾中の掃除を為す。

四月二日 今日より開業、しかし普請大成までは半業なり。<sup>78</sup>

この日記から、義塾の三田移転は、明治四年の正月から教師と塾生の一部が移転をはじめ、三月十六日に総体引越しが行われ、四月二日より三田で正規の授業がはじまったことがわかる。<sup>79</sup>

三田移転が一段落すると、村尾は義塾で教えるかたわら横浜の高島学校に出張教授にでかけるようになる。高島学校は、横浜の豪商高島嘉右衛門が明治四年十二月に創設した学校である。その創設にあたって高島は福沢諭吉に協力を依頼したため、福沢は同学校に多くの塾生を教師として派遣した。以下は門野幾之進の回想である。

横浜に高島嘉右衛門が瓦斯会社をこしらえた、その瓦斯会社の傍らでしたか、伊勢山の下のとこに塾の分校のようなものが出来て、村尾真一だの浜尾新、久保田貞一（貫一？）、吉村寅太郎というような人々が行った。吉村という人は後で金沢に高等学校が出来て校長になって行った。この人達はみな丹波丹後の人で、そのうちでも村尾という人が一番偉かったと思います。私と塾にいる折りには一緒に会読をして——色々な科学の本を会読したり、四、五人で数学者に就いて数学を会読したりした。仲間は私のほかに蘆野卷蔵、それから高嶺秀夫——後で高等師範の校長をしていた——それから後藤牧太、瀬谷鉞三郎という人——これはよく出来た人でした。その五、六人が自分たちでもって研究会のようなものを作って居りました。<sup>80</sup>

「丹波丹後の人」というのは、但馬の人の間違いである。それ以外の点については、前後の文章から察するに、

門野の記憶は正確であると思える。ここに、村尾のその後の様子が語られている。かれは義塾で教えるようになってからも、門野、蘆野、高嶺、後藤、瀬谷等とともに科学や数学の勉強会を開き、修養を積んでいた。門野の目には、豊岡藩士の中で村尾が「一番偉い」と映っていた。おそらく、一番勉強ができた、という意味であろう。また、門野の記憶が正確ならば、高島学校に行ったのは主として豊岡藩士であったことになる。つまり、明治五年初頭の時点においても、旧豊岡藩士たちは一緒に行動していたのである。

村尾が脚気のため倒れたのは、この高島学校の教壇においてであった。おそらく明治五年のことであつたろう。義塾の中堅幹部である村尾の死は福沢にとって大きな痛手であつた。それから四半世紀後の明治二十九年十一月一日、芝紅葉館における演説（後に「氣品の泉源智徳の模範」と題される）の中で、福沢は慶應義塾の歴史を顧み、「先年すでに小幡仁（甚）三郎、藤野善藏、蘆野卷蔵、村尾真一、小谷忍、馬場辰猪の諸氏を喪い、また近年に至りては藤田茂吉、藤本寿吉、和田義郎、小泉信吉、野本貞次郎、中村貞吉、吉川泰次郎氏等の不幸を見たり」と語り、彼らの早逝を惜しんでいる。<sup>81</sup>

## ②吉村寅太郎

吉村は高階、浜尾が慶應義塾を去るなかで、村尾とともに慶應義塾に残り、三田への移転を手伝う。移転後、吉村は教授と事務の双方を勤めるようになる。

三田に移ってからは、塾もにわかに大きくなって、教授と会計かけもちで、その上童子局を預かりました。玄関の横に大きな室があつたが、入口の六畳にいて、番人の役を勤めました。（中略）

独立して飯食うことを先生が教えられたのは、この頃からの事で、塾の教師の月俸は、容易い文典で四円、地理書が八円、万国史十円の相場で、三つ四つ教えると二十四、五円になる（事務員には別に規定がある）。何やかやで三十円ばかりになる。<sup>82</sup>「（）内は原注」

童子局とは、後の慶應義塾幼稚舎の前身である。同年、吉村は村尾と同様に他の塾へも教えに行くようになった。再び吉村である。

上総の松尾（藩主は太田）が、先生の所にやって来た。先生は、誰にでも文明を宣伝する。太田藩になったから、廃藩まえに洋学所を起こし、塾から輪番に赴くことになった。莊田平五郎と海老名晋と自分との三人で、三月交替で教えていた。一巡回って元の番に帰って、二度目に自分が行って、一カ月ばかりすると、廃藩になってしまった（明治四年<sup>82</sup>）。「（）内は原注」

上記の上総の松尾とは松尾藩のことで、洋学所とは藩主太田資美が建てた英学校（芝山塾）のことである。

この頃、吉村は豊岡に住む両親を東京に呼び寄せたいと考えはじめる。当時の豊岡では、旧豊岡藩士の屋敷は新政府の役人に接收され、旧藩士やその家族は親類の家や寺社に寄寓していた。そこで吉村は東京に詳しい村尾に、「東京に親を連れて糊口を凌ぐことができるか、両親と弟とを連れて来て糊口を凌ぐことができるかと相談した」<sup>84</sup>。親を東京に呼び寄せたいの思いは村尾にしても同じであった。やがて、かれらは二人そろって福沢に相談する。

国の親を引き取りたいと、村尾と自分とが、先生に迫った。村尾は、藩には帰らぬと主張した。従来藩から六円ばかりもらっていたのですが、塾から金をもらうようになるとすぐ断ってしまった。これから親を引き取るようになって迎えに行った。出立前、先生の所にいって種々教えを受けた。自分等は、お陰で教えもし、教えられるもしているが、西も東もまだ分からぬ自分が両親を連れてくるのは、如何かとうかがうと、

「食うだけなら、何でもない。芋屋でも食っているじゃないか。少しでも教育のあるものが、食えないことはない。」と言われた。両親を呼び迎えたのは、大胆だったが、これも先生のお陰だ。自分は塾にいて、両親をば寺に置いた。<sup>85</sup>

吉村が国元の両親を迎えに豊岡に帰ったのは、明治五年五月十八日である。かれはその機会に宿南の池田草庵に面会し、また元家老の猪子を訪ねている。吉村が自分と村尾の両親を連れて豊岡を出立したのは同月二十四日の朝であった。<sup>86</sup>この時吉村は頼まれて、猪子止戈之助、和田垣謙三、河本重次郎の三人の豊岡藩士の子弟も伴った。<sup>87</sup>この三人は豊岡藩遊学生第三陣にあたる。かれらは全員、後に、東京帝国大学か京都帝国大学の教授になった。

このようにして吉村は両親を郷里から東京に呼び寄せ、明治六年には家も購入するが、そのため慶應義塾からの収入だけでは生活が苦しくなった。吉村はいかに生計を立てるか思案する。福沢は明治六年七月二十日付の中上川彦次郎宛書簡の中で、吉村の動搖をつぎのように書いている。

吉村君なども昨今半信半疑、出版局へ一心、仕官へ一心、スクールマストルへ一心、とつおいつ思案最中



なり。小生は断然商売人たることを勧め、まず稽古のため出版局へ入るべしと説得いたしおり候。今頃官員だの、被雇教師だとして一年の所得五、六百のメクサレ金を何に用いるか、若かず商売の稽古をして活計の目途を様々に用意せんには<sup>88</sup>。

吉村は、慶應義塾に教師として残るか、福沢の管理する出版局へ出るか、あるいは文部省に出仕するか、迷っていたのである。福沢は「断然商売人たることを勧め」たが、吉村は文部省に出仕する方に傾いていた。吉村は語る。

塾におりましたが、後進——瀬谷、四屋、蘆野——は偉くなる、学問ができるようになる、私共は年（もちろん三十前だが——原注）はとろし、塾では飯が食えなくなる。肥田昭作、永田健助、木村一步、海老名晋の諸氏は、文部省に入る、このような風潮になってきた。明治六年九月ごろから、私は肥田さんの下に出ることになり、先生（福沢諭吉——引用者注）は私の縁側に腰をかけられた。その時私は、お暇乞いを申しあげました。「あまりお役にも立ちませんし」と申し上げると、先生は別段お叱りもなく、懇々とご説諭になった。ご親切は謝したが、もう出たいという一念が募っていましたから、ご説諭に従いませんでした<sup>89</sup>。

こうして吉村は慶應義塾を去り、文部省に出仕することを決意した。

その後、いよいよ確定したので、先生の宅から呼びに來ました。「塾の法として、役人は一切、塾に置か

ないときめたから、文部省に行くからは、出てもらわねばならぬ。しかしお前は、家を建てたそうだから困るだろう。」と言われた。自分は先生のお世話になりましたから、構いませんと答えました。随分淡泊な、欲のないものでした。先生は、売買は半額のものだから、二百五十円で買おうと言われた。ちょうど出版局のできたところで、一種の貯蓄銀行が出来ていたので、金はそこへ入れて置くつもりでしたから、淡泊に答えました。<sup>90)</sup>

明治六年十一月、吉村は文部省九等出仕に補せられる。その後、かれは広島外国語学校長、文部省学務課長、第五地方部視学官、二高校長、四高校長を歴任した。<sup>91)</sup> 文部省に出仕した後も、福沢と吉村との間の連絡は絶えなかった。吉村はいろいろ福沢の相談に乗っていた形跡がある。<sup>92)</sup> 福沢にとって、吉村は文部省内の事情を知るうえでの情報源の一つであった。

明治十一年、文部省で東京学士会院設立の話がでると、福沢は同年十二月十八日付の田中不二麿文部大輔宛書簡で、「先日学士院の話に書記官幾名を命ずる云々の事あり。……小生思うに旧広島師範校長吉村寅太郎なども随分宜しからんと存候。御考置奉願候」と、吉村を学士院の書記官に推薦している。<sup>93)</sup> 政府の緊縮財政の結果、文部省を解雇され広島県吏となった吉村を東京に呼び戻そうとしたのである。福沢も絶えず吉村のことを気にかけていたことがわかる。その後、吉村は学務課勤務として文部省に戻った。<sup>94)</sup>

吉村が仙台の第二高等中学校長（後の第二高等学校）に就任したのは明治二十年四月である。これから十年間かれはこの職にあり、明治三十年三月、第四高等学校長に転じた。四高に移る前年、吉村は福沢に転職の相談を持ちかけた。以下は明治二十九年十月十日付の、福沢の庄田平五郎宛書簡である。

過日一寸お話し申し上げ候吉村氏の義、なにか御考案も可有之哉。実はこれまで度々語りしこともあり、老生の考えには、余り人に話するよりも莊田君などが海外より帰来も近し、兎に角に事は徐々にすべしとて、必ずしも盟兄をあてにするにはあらざれども、それこれと致し居り候中、今朝仙台より来書、別紙の通りなり。決して無理に申し上げ候訳には無御座候得ども、昨今随分人物入用の折柄、若しも相当の地位もあらばご心配被下候様奉願候。氏の書中にも言うごとく、氏が今日に至り実業界に出身は不似合いならんかと自ら疑うものの如し。その辺も御考、果たして不似合いならば余計な事を思う勿れと留め可申、その辺のご意見も伺いたく奉存候。<sup>95</sup>

この書簡によると、吉村は以前から転職を考え、福沢に相談をしていたことがわかる。この件に関し、福沢は莊田になにか適当な地位はないかと尋ねている。当時、莊田は日本郵船会社の要職にあった。吉村は両親を養うため文部省に出仕したが、仕事に行き詰まりを感じ、悩み、転職を考えていた。官の氣風が合わなかったのかもしれない。しかしまた、すでに数十年間教育界で働いてきた者が、いまさら実業界に転身というのはどういうものだろうか。吉村はこの点についても福沢の意見を求めている。結局この話は実を結ばず、吉村は二高にとどまり、翌年、同校で起きた全学同盟休校と校長排斥運動に遭遇する。

二高で起きた同盟休校のきっかけは、明治三十年二月、二高医学部の品行不良生が本科（大学予科）の生徒の名前で登楼、それを学校当局が十分な調査をせずに本科生二名を退学処分にしたことにある。<sup>96</sup>これに憤慨した学生は同盟休校におよび、ついに吉村校長の辞任を求めるに至った。このストライキの経緯を当時学生であった齋

藤隆三はつぎのように語る。

当時の学校長は吉村寅太郎といって、慶應義塾出身で創立以来の存在であった。温順の人だが風采も揚らず豪快颯爽などという点は微塵も見られず、入学式の訓示にしながら、「からだを大事にしてお父さん、お母さんに心配をかけぬように」とか、「お菓子を食べるならそれを節約して牛肉を食べなさい」とかいった調子。まるで小学校の校長さんという風であったので、青年活気に満ちた吾々には意外の感であった。当時は特に高等学校といえは、木下広次氏によって作られた第一高等学校流儀が標準であって、節義氣慨涵養をまっしぐらに剛快と粗暴をさえ混同し、服装などもなるべく汚れて破れているのを誇りとし、痛快がっていたものを、身なりをきれいにせよ、学校でも必ず上草履を用いよ、という方針で臨まれたのであるから面白くなかった。特に東北にある学校であり、東北の青年が多く在学せる学校ではあったが、学生の主流をなしていたものは東京の中学校から来た者、または吾々のように関東方面から来たもので占めていたのだから校長に対する不満は一校を蔽うに至った。<sup>97</sup>

一方、成田衡夫（後の弘前高校教授）はつぎのように語る。

余が在学当時の学校長は吉村寅太郎先生であった。講堂に生徒一同を集めて何か訓示があるときには、必ず「〇〇をしてお貰いたい」といねいな言葉を使われたものだ。先生は中肉中背で、精悍にして凜々しき氣象眉宇の間にあふれ、一見事務官肌のお方のように思われた。<sup>98</sup>

また、波多野高吉（後の大審院検事）も、「当時の校長吉村先生は、常に体操の時間には石塊を拾ってくれたものだ。生徒が負傷しないようにとの注意のために。同校長は常に正義を説いておられた」と語っている。<sup>99</sup>吉村校長を支持する学生も大勢いたことがわかる。また、当時の二高の教授の多くも吉村を支持し、吉村が二高を去ったとき十名ちかくの教授が行動を共にしている。ただ、吉村の英語の発音は不評である。明治二十七年に第二高等中学を卒業した三浦菊太郎（後の浪速高校長）は当時の授業を回想して、「時々吉村校長のスマイルス自助論の講義があつたようである。いまでいう修身であろう。その異様な発音に驚いた覚えがある」と語っている。<sup>100</sup>初期慶應義塾の変則的発音が、後のちまで吉村にとってのマイナス要素となった。

では、吉村校長はなぜ十分な調査をせず兩名の退学を決定したのだろうか。その背景を当時の学生代表は、「頃来校内不品行の風説喧しき際なれば、あるいは今回の事件は上野を犠牲に供して校中に示すの処置に出でたるならん」と推測している。<sup>101</sup>

学生の衛生・栄養への配慮、教場や寮の整理整頓、清潔な町人風の身なりなどは草創期の慶應義塾が励行していたところである。これに対し、旧制高校の特徴とされる高下駄、羽織はかまに汚れた腰手ぬぐい、弊衣破帽の風習、街頭での寮歌放吟、寮内での蛮行など、どれも慶應義塾の校風とは合わないものである。木下広次の提唱する一高の籠城主義と、福沢の世俗とともに歩む姿勢とは相いれない。そのような旧制高校の校風のもとでは、慶應義塾で平民主義として励行されていた丁寧な言葉遣いまでが学生には物足らなさと映り、校長排斥の理由の一つにまでなってしまう。官吏としての出世を保証する旧制高校と、平民主義を標榜する草創期の慶應義塾の校

風の違いをここに見る思いがする。

### ③ 浜尾新

吉村寅太郎によると、浜尾は明治二年九月慶應義塾に入塾した後、「陸軍に入るため仏語を研究する必要上、本所の村上（英俊）塾に転じました」とある。それゆえ、彼が慶應義塾にいた期間はそれほど長くはなかったものと思われる。その後の浜尾の足跡については、加田邦憲（後の貴族院議員）が「（浜尾新は）村上仏学塾大学南校ニ於テ修業（兩校ニテ予同窓）過度の勉強ノ為メ痛ク心臓ヲ害シ医師ノ勸メニ従ヒ断然廃学シテ実務ニ就カンコトヲ決シ大学南校舎監ノ職ニ就」くと語っている。<sup>102</sup> 浜尾は明治三年には大学南校に在学していたと思われる。新政府が全国の諸藩から貢進生を募集したのは明治三年七月、全国から貢進生が大学南校に集まってきたのが同年末から翌明治四年初頭にかけてである。貢進生とは、文字通り新政府にたいする各藩からの人材の貢ぎ物であるが、藩の石高に応じてその推薦枠が決まっていた。豊岡藩の推薦枠は一名で、国元の沖野忠雄が選ばれた。浜尾は選にもれ、大学南校を退学する。加田の回想に、「心臓ヲ害シ医師ノ勸メニ従ヒ断然廃学」とあるのはこの頃のことであろう。大学南校をやめてからの浜尾の動向については『慶應義塾出身名流列伝』に、以下の通り記されている。

（浜尾氏は）江戸に派遣せらるるや福沢先生の門に入りて英学を修め、また外人に就いて仏語を学べり。後ち、大学南校に入りて優等の成績を得、卒業後本郷丸山に共憤義塾を開き、<sup>ひよか</sup>窃に慶應義塾を凌駕せんと期したりしが、明治五年文部卿の鑑識を以て大学南校生徒舎監事に挙げらる。<sup>103</sup>

本郷の共慣義塾は南部藩が建てた英学塾であるが、当時、慶應義塾出身の佐藤三介が実質的な塾長であった関係で多くの義塾出身者が教えていた。<sup>104</sup> 浜尾もその中にまじって教えていたのであろう。また前に見たように、浜尾はかつての豊岡藩の同僚とともに横浜の高島学校で教えたこともあると思われる。いずれにせよ、明治四年から五年にかけての浜尾は、慶應義塾と関連のあるいくつかの塾で教鞭をとっていたものと思われる。そして明治五年三月、浜尾は「実務ニ就カンコトヲ決シ大学南校舎監ノ職ニ就」いたのである。つまりかれは学生としてではなく、学生寮の監督者として大学南校に戻ったのである。これ以後、大学南校の生徒の気風は一変したと伝えられる。明治八年に大学南校の後身、東京開成学校に入学した斉藤修一郎は、「前後各時代の監事を通じて浜尾の如く誠実な、熱心な、活動的な良監事はなかったらう」と語っている。<sup>105</sup> 浜尾は大学南校の学生寮改革にあたっては、当時の日本の教育機関の中でもっとも整備された校風を確立していた慶應義塾を参考にしたものと思われる。さて、上の引用文中には「(大学南校を)卒業後本郷丸山に共慣義塾を開き、窃に慶應義塾を凌駕せんと期したり」と記されていた。『慶應義塾出身名流列伝』の編者野依によると、この本の原稿の大半は直接本人に目を通してもらい加筆訂正してもらったとある。上に引用した部分は本人しか知りようのない浜尾の意欲が記入されているので、おそらく本人の筆が入っている部分と考えることができよう。では浜尾は福沢と慶應義塾をどう見ていたのか。浜尾の福沢観を語るエピソードを見てみよう。

福沢諭吉と慶應義塾の中心メンバーが、西洋のスピーチとディベートに興味をもち、その研究と練習をはじめたのは明治六年頃である。翌七年一月、副島種臣、江藤新平、板垣退助等が「民撰議院設立建白書」を政府に提

出している。このような社会の動きのなかで、福沢等の「集会の体裁」の研究、「演説弁論の技術」の練習はすすめられた。すなわち、「議院なり国会なり要するに言論を以て事を決するの場所である、しかるに日本人は意志発表の機関たる演説について何らの素養も習練もないではないか、(中略)民選議院の早晚論はともかくも各種の集會會議は是非とも必要である。それには弁論術の研究こそ何よりも第一の急要である」と福沢は考えたのである。<sup>106</sup>この意図のもとに福沢等の研鑽は続けられ、習熟の度を増したので、明治七年六月、三田演説会が始められ、翌八年には練習の成果を広く一般に公開し演説の法を天下に広めるために演説館が建てられた。同年五月一日、その開館式が挙行されたが、当日は慶應義塾社中をはじめ、外部からも学者、官員、書生、職人等、四百余名が参会し、祝辞に拍手をおくった。当日演壇に立ったのは小幡篤次郎、朝吹英二、和田義郎、松山棟庵、福沢諭吉等で、みなそれぞれ演説弁論の術の意義と必要とを力説したのである。<sup>107</sup>

浜尾新が東京開成学校(以後、単に開成学校と記す)に講義室の建設を計画したのは明治九年頃であつたろう。実際の工事は同年八月に着手され、同十二月に完了した。総工費三千六百元、建物の面積八十七坪余であつた。<sup>108</sup>

三田の演説館は総工費二千数百円、坪数五十七坪余。<sup>109</sup>  
後に浜尾は当時の経緯を次のように語っている。

明治十年のころ、私は今の帝大の前身なる開成学校に在職していましたが、その開成学校で演説講堂を新築しました。当時福沢先生は慶應義塾を開いて盛んに西洋文明の輸入をせられておりましたが、単に本を読むばかりでは駄目だ、これを筆で書き、口で述べるということが肝要だということで、しきりに演説文章のことを鼓吹しておられました。そこで開成学校でも大いに演説を盛んにしようというので講堂を建てたわけで



浜尾は福沢の演説振興の意図を理解しそれに共鳴して、開成学校に演説用の講義室を建てたのである。当時、開成学校の生徒であった三宅雪嶺は「講義室というのは、明治十年頃新築され、卒業式とか、何か大きな集りのためであり、演説会のためでもあった。後に比べて貧弱なものながら、千人位を収容するに足り、その頃で東京における有数の会場であった」と語っている。<sup>111</sup>

明治十年三月十日に講義室の開講式を開くことになり、浜尾は福沢に記念演説を依頼する。

いよいよ開講式を挙げるについて、私は福沢先生に一場の演説をお願い致しました。ところが先生も非常に喜ばれ「それは結構なことだ、よろしい、お話しいたしましょう」と早速ご承諾になりました。当時は官民疎隔とでも申しましょうか、とかく官辺と民間との間が円滑に行かず、学校でも官学私学と区別を立てるというような次第で、ことに先生の如きは袴を着けて官府に出入するというようなことは大嫌いであったよう、政府は政府で『学問のすすめ』など先生の著書によって随分啓発されておりながら、やはり表立って先生の意見を聴くというようなこともなかったのです。そういう状態の時に、私が開成学校から参って先生のご講話をお願いいたしましたので、先生も大変喜ばれたわけです。さて、開講式の当日には、私が最初講堂建設の趣意や福沢先生の紹介などを一通り述べて、それから福沢先生が演説せられ、そのつぎに西村茂樹先生が演説せられたように記憶しております。<sup>112</sup>

ここに当時の浜尾の行動の基本パターンを見いだすことができる。つまり浜尾は、当時の官民疎隔の風潮の中にあつて、積極的に福沢諭吉のアイディアを官立学校の中に取り入れ、それを生かそうとしているのである。このことから、大学南校生徒舎監事時代にも、浜尾は慶應義塾の運営方法を大いに参考にしたと推察されるのである。前述の、「窃に慶應義塾を凌駕せんと期したり」という文章は、慶應義塾に対する反発というよりも、《このような学校を自分も創りたい》との、明治四、五年頃の浜尾の願望を語っているのであろう。福沢もまた浜尾には悪い感情を抱いてはいなかった。曾根松太郎『当世人物評』（明治三十五年）には、「故福沢諭吉翁が九鬼（隆一）君を喜ばないで『彼は余の門弟なれども之を好まず』と言っていたが、浜尾君のことは冷評しなかった」と記されている。<sup>113</sup>

さて、当日の福沢の演説について、三宅は次のように語っている。

その頃慶應義塾は文部省の大学と対抗の形があり、いくらか睨み合いもした。（中略）まだ福沢も元氣な頃、三田から長靴で歩いて来たり、泥道を歩いて来たので迷惑な次第といい、それから大学は盛大になるばかりがよいことではなく、盛大盛大盛々大々となるよりも、他の模範になるように望みたいという意味のことを述べた。<sup>114</sup>

当日、福沢は開成学校に莫大な費用がかかる点を指摘し、諸君たち開成学校の生徒は日本の「果報者」であり「秘蔵息子」であると論じた。さらに、日本全国民に開成学校生と同様の教育を授けることの不可能を論じ、「今の政府の急務は、人民にかくのごとくすべしとの法を示すにあり、自ら手を下してかくのごとくするの術を行う

べからざるなり」と説いた。政府は人民に「小にして高尚な」学校の見本を示すにとどめ、教育の実務は民間の私学に任せるべきとの見解を示したのである。福沢は「政府自ら百手を下し、直ちにかくのごとくするの術を施行せんとする」ことは、国財の浪費につながるばかりでなく、民間の自由な活動を阻害することにもなると指摘し、「これ諭吉が政府の多事を悦ばず、官学校の盛大を願わずして、ただ事務の精密を祈る由縁なり」と結んだ<sup>15</sup>。この議論には、浜尾は異論があつたかもしれない。

その後、明治十年に東京開成学校は東京大学に改組され、演説会もますます盛んに行われるようになっていったが、自由民権運動が勢いを増し、それに対する政府の危機感も強くなると、大学当局の演説会に対する監督干渉も強化されざるを得なかつた。そして明治十年代後半になると東京大学における演説会は衰退していった<sup>16</sup>。

後に、官学者を尊重する一方で民間の実業家を嫌い、誠実で謙虚である反面、頑固なほど保守的なところがあり、時に「官僚の典型」などと呼ばれることもあつた浜尾であるが、当時は進歩的な側面もあつた<sup>17</sup>。

従来、浜尾が慶應義塾に在学した期間があまりに短い（せいぜい数カ月）ことから、浜尾に対する福沢の影響がどれほどか分らないところがあつた。しかしここに見たように、少なくとも明治十年までの浜尾は福沢の影響の下にあつたと考えられるのである。

## 結語 —— 郷里と国家、民と官 ——

わたしは本稿の序に、豊岡藩は全国二百数十の諸藩のうちで教育立藩にもっとも成功した、と書いた。しかし

ここでいう「成功」とは何だろうか。たしかに多くの旧豊岡藩士は中央に出て出世した。しかしこれらの多くは、一度中央で認められると郷里に戻ることはほとんどなく、また郷里豊岡の発展に貢献することもまれであった。たとえば、沖野忠雄は東京大学で工学を学び、当時の日本における治水の第一人者であったが、故郷の円山川の改修には在官中ついに手をつけなかった。円山川の氾濫に悩まされつづけた豊岡人として、かれこそそれを行うべき人間であった。浜尾新にしても、郷里の青年の上京を促し、上京後はその面倒を見たくらいであったろう。

猪子清も旧藩士の再就職の世話が終わると豊岡を出て京都に移ってしまった。この点について田住豊四郎『現代兵庫県人物史』（明治四十四年）は「兵庫県下出身の人物は概して情誼に乏しく、先輩にして地方の青年を指導せざるのみならず、郷侶を思う者もまたすくない（中略）。とくに豊岡出身の士に至っては地方を顧みる者はなほ少なく、はなはだしきに至りては教育家をもって任じつつある人にして祖先の展墓も閑却している人物がある」と憤慨している。<sup>118</sup>つまり、豊岡藩の教育分野における成功とは、藩の人材を最大限に生かしたという意味であって、郷里豊岡の発展と直接に結びつくものではなかった。多くの豊岡藩士は中央に出ると国事に忙しく、郷里を顧みる暇はなかった。その意味で、武士は本質的に郷里をもたない根無し草ということができるかもしれない。しかしまた、だからこそ、特定の地域と強い絆で結ばれることがなく、維新後、国家という公の大義に生きることが出来たといえるのかもしれない。

多くの豊岡藩士にとって、慶應義塾は上京後の拠点の一つとなった。では、慶應義塾にとって豊岡藩士の入塾はどのような意味をもっていたか。

明治五年十一月に慶應義塾から東京府に提出した「私学明細表」と題する文書があるが、そこには当時の慶應

義塾の教職員全員の氏名と経歴が記されている<sup>119</sup>。それによると、当時の慶應義塾の教職員は福沢諭吉を含めて合計二十二名であり、その出身地は十府県に及ぶ。そのうち旧中津藩のあった小倉県出身者（福沢諭吉、小幡篤次郎、小幡甚三郎、浜野定四郎）と旧長岡藩のあった柏崎県の出身者（藤野善蔵、渡部久馬八、名児耶六都、蘆野卷蔵）がそれぞれ四名づつでもっとも多い。次いで豊岡県出身者（小谷忍、村尾真一、吉村寅太郎）と美々津県出身者（海老名晋、四屋純三郎、菊地財蔵）の各三名、さらに和歌山県出身者（和田義郎、草郷清四郎）と額田県出身者（新田礼太郎、後藤牧太）の各二名とつづく。つまり、人数から見ると豊岡県は草創期の慶應義塾を支えた四県のうちの一つである。もっとも正確には、小谷は旧宮津藩の出身であって豊岡藩の出身ではない。たまたま当時、同地が豊岡県に編入されていたのでこの表示になっている。しかし、かつてこの地を京極氏が領有していたこともあって、宮津藩と豊岡藩とは深い関係をもっていたことが知られている。なおこのほかにも、明治五年の年初の時点で、慶應義塾の分校の親があつた高島学校に出張教授していた者として浜尾新、久保田貫一兩名の旧豊岡藩士の名があがつており、当時彼らも慶應義塾教授陣の予備軍を形成していたものと思われる。よく中津藩、長岡藩、和歌山藩を指して慶應三藩（あるいはこれに薩摩藩を加えて慶應四藩）と呼ぶことがあるが、それは草創期の慶應義塾に大勢の生徒を送り込んだ藩を言ったものである。しかし上述したように、慶應義塾運営の中核を担った教職員の面から見ると、それとは別の慶應四県を指摘することができるのである。真面目で学問を好み、謙虚で忍耐つよい豊岡藩出身者は、草創期の慶應義塾のあり方に少なからぬ影響を及ぼしたものと想像される。

本稿では幕末・明治期における数人の若き豊岡藩士の動きを追跡した。つまりかれらの青雲の志を抱いての上京、慶應義塾への入塾とそこにおける新しい思想、制度、生活習慣との接触、その後の活躍ぶりについてみてき

た。おそらく、かれらの遭遇したカルチャーショックは、全国から入塾してきた若者すべてが経験したものであろう。明治元年から五年にかけて、慶應義塾への入塾者の数は千名を越え、その出身藩は二百余におよぶ。これらの藩から、多くの若者が藩の運命を担い、大きな期待を抱いて慶應義塾に入塾した。一つ一つの藩に、そして派遣された藩士一人一人に、それぞれのドラマがあったに相違ない。

豊岡藩遊学生第一陣四名の場合、その後の進退はさまざまであった。高階は早々に郷里へ戻った。村尾は慶應義塾の教師として生涯を終えた。吉村は慶應義塾から文部省へ移ったが、死ぬまで思いは官と民の間で揺れつづけた。早くに官に出仕した浜尾は、文部省内で出世し、後に帝国大学総長、文部大臣を歴任した。

ここで豊岡藩遊学生全体の動向を概観してみたい。第三表は、文久年間から明治二十年頃までの豊岡藩士（および元藩士）の遊学先の一覧表であるが、この表により同藩遊学生の遊学先の移り変わりを知ることができる。つまり同藩遊学生の遊学先を中心は、おおざっぱに言うならば、まず郷里の青谿書院、次いで東京の慶應義塾、そして東京大学へと移ったのである。

明治以後上京した豊岡藩士の大部分が、それ以前に国元の青谿書院で学んでいる。明治時代にはいつてから上京した豊岡藩士の大部分はまず慶應義塾に入塾した。豊岡藩士の入塾は明治二年から五年までに集中しており、その中には京極家の子弟もまざっている。明治五年に入塾した豊岡藩士の身元保証人になったのは、すでに義塾の教師になっていた村尾真一と吉村寅太郎である。明治六年以降豊岡からの入塾がなくなるのは、廃藩置県のために藩から遊学生への学費の支給が止まったからである。たとえば、明治四年一月に入塾した神谷肅一郎（肅二）は、やがて藩からの支給が止まったので退塾せざるを得ず、一時は路上でロウソクや豆腐を売り自活するほど生活に窮したと伝えられている<sup>120</sup>。そして明治十一年以降になると学費のかからない東京大学（そして帝国大

第三表 豊岡藩士の遊学先一覧表

年に入塾(学)年(不詳=入学年不詳)

名 姓	生 年	安井忠軒	青船書院 (池田卓庵)	慶応義塾	達理堂 (村上英俊)	大学南校、東校 東京大学	後の経歴
久保田精一	天保13(1842)	文久1(1861)	元治1(1864)	明治2(1869)			藩校学長、室林義塾(豊岡)長
高階守人	天保14(1843)		元治1(1864)	明治2(1869)			
富永隆(元庵)	弘化3(1846)			明治3(1870)	明治2?(1870)		文部大臣
久保田謙(謙之助)	弘化4(1847)		元治1(1864)	明治5(1872)			慶應義塾教師、第二、第四高等学校長
吉村寅太郎	嘉永1(1848)		文久1(1861)	明治2(1869)			慶應義塾教師
村尾寛一(武之助)	嘉永1(1848)		慶応1(1865)	明治2(1869)			帝國大学総長、文部大臣、東宮大夫
浜尾新	嘉永2(1849)			明治2(1869)	明治2?(1869)	明治3(1870)	司法省監獄局長
久保田實一(貫一郎)	嘉永2(1849)		慶応1(1865)	明治5(1872)			陸軍歩兵中佐
勝田敏郎	不明		明治1(1868)				豊岡県師範学校長、豊岡小学校長
神谷清一(清一郎)	嘉永2(1849)	明治3(1870)	明治2(1869)	明治4(1871)			陸軍歩兵少佐
小林寅敬(源人郎)	嘉永2(1849)	明治3(1870)	明治2(1869)				文部省14等出仕(明治7年)
一戸才次	嘉永5(1852)			明治4(1871)			貢進生、工学博士
坂本忍	不明		明治4(1871)			明治3(1870)	
沖野忠雄(尾藤忠雄)	安政2(1855)						
京極千里	安政3(1856)		明治4(1871)	明治5(1872)			
下村三一郎	安政4(1857)			明治5(1872)			
河本重次郎	安政6(1859)						
猪子止文之助	万延1(1860)					明治12?(1879)	東京帝国大学教授
和田垣謙三	万延1(1860)					明治11?(1878)	京都帝国大学教授
岡本梁松	文久3(1863)					明治18(1885)	京都帝国大学教授
猪子吉人	慶応2(1866)					不詳	帝國大学医科大学教授
下村三四吉	明治1(1868)						東京女子師範学校教授
生駒恭人	不明		明治4(1871)				沖繩県立師範学校長、三重女子師範学校長

◎青船書院の入門者については豊田小八郎(但聖人)(明治40年)所収の入門帳、慶應義塾については『慶應義塾入社帳』(1986)、達理堂については富田仁『仏蘭西学のあけぼの』(1975)所収の門人名簿および龍田貞治『仏学始祖村上英俊』上巻(1934)、東京大学については『第一大学区第一高等学校一覽表(明治6年3月)』、『東京開成学校一覽(明治8年2月)』等により調べた。その他、田住豊四郎『兵庫県人物史』(明治44)、『豊岡誌 全』(1942)等も参考にした。

学)が遊学先には選ばれるようになる。これには、明治十年に同藩出身の浜尾新が東京大学法学部理学部文学部綜理補に就任し加藤弘之綜理に次ぐ地位を占めていたことも影響しているであろう。豊岡出身のジャーナリスト、そして後の政治家、古島一雄は豊岡出身者の気風をつぎのように語る。「当時(明治十三年前後と思われる)引用者注、我藩の出身では先輩には浜尾、久保田(譲)、吉村氏などみな文部省関係の役人であり、ことに浜尾先生が大学と密接の関係がありましたため、浜尾先生を中心とする藩の子弟は大学に入らざれば人に非ずというような風がありました。」<sup>121</sup>明治十年頃を境に、旧豊岡藩士のあいだには官を尊ぶ気風が満ちていたのかもしれない。

明治十五年の『改正官員録』中の文部省要職一覧によると、浜尾新大書記官、久保田譲少書記官、吉村寅太郎権少書記官と、三名の旧豊岡藩士が文部省の中樞に入っている。後に浜尾は専門学務局長、久保田は普通学務局長となり、中・高等教育と初等教育を担当する部局の長を両方とも旧豊岡藩士が占めることになる。<sup>122</sup>後にこの二人は文部大臣にもなった。また、序に書いたように、旧豊岡藩は多くの官学者も輩出している。藩の貢進生に選ばれて大学南校に入学した沖野忠雄は、後に英仏に留学し、帰国後、東京職工学校(現東京工業大学)の教諭となった。明治五年五月、吉村寅太郎に連れられて上京した猪子止戈之助、河本重次郎、和田垣謙三も、全員浜尾の世話になりながら東京大学を卒業した。その後、猪子は京都帝国大学医科大学教授兼付属病院長に、河本重次郎は帝国大学医科大学教授、和田垣謙三は帝国大学法科大学教授になった。<sup>123</sup>このほか、帝国大学医科大学卒業後、同大学の助教授に就任、ドイツ留学中に没した猪子吉人(止戈之助の弟、帝国大学を卒業して、後に京都帝国大学教授となった岡本梁松、その弟で帝国大学卒業後、東京女子師範学校教授となった下村三四吉なども、やはり官学を出て官学者となった人々である。<sup>124</sup>藩士総数百人余の豊岡藩がこれだけ多くの教育行政官および学者を出したことは壮挙といえるべきであろう。



このように豊岡藩遊学生は、明治十年以降になると東京大学とその後身である帝国大学に入学し、卒業後は政府に仕官する者が増えた。その原因の一つは、これを豊岡藩自身の体質に求めることができる。明治三十五年に出版された曾根松太郎『当世人物評』は、豊岡と隣の出石とを比較し次のように書いている。

出石と豊岡とは、同じ但馬の国でも、おおいにその氣風を異にし、出石の人は一般に活発で、豊岡の人は一般に温厚だから、明治の新天地に現れた人も、出石人は白井政夫、桜井勉、青木匡、巖本善治、乗竹孝太郎、桜井駿の諸君をはじめ、多く私立学校を卒業して、民間に働き、豊岡人は浜尾、久保田（讓）の両君、久保田貫一、和田垣謙三、河本重次郎、猪子止戈之助、猪子吉人の諸君を始め、多く官立学校を卒業して、政府に仕えた。（中略）現に豊岡には育英社というものがあって、資金を学生に貸して学問をさせているが、その学生は皆官立学校を卒業して、政府に出仕する目的を有している。浜尾君はよくこの育英社の世話をしているから、学生らもまた彼を崇拜し、彼を以てその理想の人としている、またすでに卒業して政府に出仕した者も少なくない、三、四年前にある人が計算したら、豊岡出身の官吏が、奏任官以上に三十四名あったそうだ。<sup>25</sup>

「出石の人は一般に活発で、豊岡の人は一般に温厚」であり、ゆえに出石藩出身者は「私立学校に学び、民間に働く」者が多いが、豊岡藩出身者は「官立学校を卒業して、政府に仕える」者が多くなる傾向があるという。この指摘から考えられることは、豊岡藩には官に向く人間を育てる風土があった、ということであろう。最初に書いたように、豊岡藩主京極家は公家的な性格をもつ大名である。豊岡藩は宮仕えに向いた人物を数百年かけ

て培ってきたのかもしれない。その藩の伝統が、代々江戸詰で祐筆を勤めた浜尾家に集中的に現れたとみることもできるだろう。旧豊岡藩士の中には神谷肅一のように、慶應義塾、東京師範学校で学んだあと豊岡小学校の初代校長を勤め、十二年間にわたって郷里の青少年を指導した後、「深く時勢に感ずるところあり」官を辞して、東京で私塾済美塾を開き郷土出身者の育成に力を注いだ者もいた。<sup>126</sup>しかしそのような生き方は豊岡藩士の主流ではなかった。

しかし、豊岡藩士を官に向かわせた最大の要因は、当時の日本政府の政策にあったといえる。前に、浜尾新が「本郷丸山に共慣義塾を開き、窃に慶應義塾を凌駕せんと期し」たことを記した。そして私は、この文章は明治五年当時の浜尾の願望を語っていると解説した。しかしこの一節は、そのほかに、これを発表した時点（明治四十二年）での浜尾の自負をも示していると考えることができる。浜尾は明治初期、慶應義塾に対抗できる学塾を創りたいとの願を発した。しかし、本郷の共慣義塾ではその願は実現しなかった。彼の夢は、政府の官学優遇政策の助けを得て、東京大学で一部実現したのである。

すなわち廃藩置県を断行した翌明治五年二月、政府は文部省令第二号により「私塾の生徒へ公費支給の儀一切廃止」を通達した。<sup>127</sup>つまり「従来の藩費生の制度を府県の公費生制度に切りかえるとき、私学に対しては公費生の取扱を適用しない」こととし、以後は、東校、南校等の官学で学ぶ生徒にのみ公費を支給することとしたのである。<sup>128</sup>当時、慶應義塾に学ぶ生徒の約半数は公費生であったので、塾内の動揺は大きく、同年以降入塾者数も激減した。前述した沖野忠雄が学費が払えず義塾を退学したのはこの時である。これに対し福沢は同年三月、「官の学校といい私立学校というも、ただその相違は教師の官員に列すると否とのみにて、教授の方は大同小異、詰

り日本国の生徒を導き文学を開候儀」は共通であるのに、いま私塾の生徒のみを差別扱いするのは理屈が通らないのではないかと抗議したが聞き入れられなかった。<sup>130</sup>

さらに明治十二年十月、明治政府は徴兵令を改正し、それまで私立学校にも与えられていた兵役免除の特権をこれ以後、官公立学校の教員生徒のみに限って適用することとした。この時慶應義塾は、私学ながら例外的に従来通り兵役免除の特権を保証された。しかし明治十六年に徴兵令が改正強化されると、ついにその特典も剝奪されてしまった。この改正徴兵令の発布の結果、慶應義塾の一カ月間の退塾者は百余名にのぼったという。福沢は明治十七年、東京府知事芳川顕正宛に特典の回復を申請する「願書」を提出し、このままでは義塾は廃塾に向かわざるを得ないと訴えている。<sup>131</sup>この申請に対する回答と思われる文書が「文部省意見」と題されて残っている。そこには、官立学校は「国家必需の学生生徒を養成する」のに対し、私立学校は「国家に弊害なきを認めて、之が設置を許すもの」にすぎないと述べ、「万一、私立学校にすることごとく教員生徒を失い、該塾の如きも一旦廃滅に帰したりと仮定するも、国家に必須緊要なる学校に比擬すべきものに非ざる上は、また必ずしも之を患うるに足らざるなり」と結んでいる。<sup>132</sup>当時の文部省が極端な官尊民卑思想に凝り固まっていたことがうかがえる。この時の文部卿は大木喬任、専門学務局長は浜尾である。この後も、公立中学の校長教員資格などさまざまな点で、文部省の私学抑圧政策はつづけられた。これに対し福沢は、明治二十七年『時事新報』紙上に「社会の弊習は根底より断つべし」と題する記事を載せ、政府は「官立の学校には種々の特典を与えてその繁盛を謀りながら、私立は之を排斥してあたかもその自滅を促し、また官立の教師は官吏同様に位階等を授けてその威光すこぶる高きに反し、私立の教師はあたかも方外の徒として冷遇するが如き、およそこの種の例を計ふるときは数限りもなきことにして、官尊民卑、専制時代の復色と見るの外あるべからず」と論じ、その片寄った教育行政を批判

している。<sup>132</sup>

明治三十年、浜尾が文部大臣に就任したとき、『教育壇』誌は「私立学校の将来——浜尾大臣の方針を問う」と題する記事を掲載し、その中で「新任文部大臣浜尾氏は、平生官立学校の万能を信じ、私立学校の勃興を抑える方針をとり、いづぞや文部省にて私立学校撲滅策をとりし時の如き、氏は実にその張本人なりきという。試みに問う、氏は今回文部大臣となりても、なおこの方針を確守せんとするか」と論じた。<sup>133</sup>また、明治三十三年、加藤高明が大学出身としてはじめて外務大臣に就任したとき、浜尾は「今後二十年内閣員は悉く帝国大学の出身者となるであろう」と豪語したという。<sup>134</sup>ここに、明治期の国策に忠実に従う浜尾の姿がうかがえる。『教育壇』の記事がどこまで真実を伝えているか確かではないが、浜尾が官尊思想を抱いていたことは確かであろう。浜尾はこの時点では、はっきりと福沢とは異なる道を歩んでいたことがわかる。後に三宅雄二郎（雪嶺）は、「浜尾男は官に阿るの意なく、常に公平無私を以て居るが、多年官に生活し、習性となつてほとんどことごとく官を標準とするに傾く、なんでも官でなければならぬ様に思うと見える」と書いているが、これなどは公平妥当な浜尾評であろう。<sup>135</sup>

さて、豊岡藩士の遊学先は地方から中央へ、私塾から官学へ移り、その多くは卒業後、官に出仕した。しかし価値観の重心の郷里から国家への、民から官への移行は、豊岡藩士のみに見られたことではない。同じ傾向が日本近代を通じて全国的に見られた。東京大学が国費で整備されるにつれて、多くの若者がそこに向かうのは自然の流れである。しかもその流れは、元はといえば当時の政府が官学優遇私学抑圧政策により意図的人工的に作り出したものでもある。浜尾とそれにつづく豊岡藩士の動きは、この政府の文教政策を反映している。かれらは初めその流れに乗り、後に流れに参画し流れを形成する役割を担ったのである。

明治時代は、官にあらゆる栄誉や権力が集中しつつあった。福沢諭吉はこのような「権力の偏重」を嫌った。なぜならば、一国の文明の発展は官の力のみによるものではなく、民間の力に多くを負っているからである。文明発展のイニシアティブはむしろ民間がとるべきであった。それにもかかわらず前途有為の青年がみな官に靡いては、日本社会の総合的な発展は望めない。福沢が吉村寅太郎に民間に出ることを勧めたのは、このためであつたらう。文明の進歩は民間が担う。官の役割はそれを側面から援助して、人民が自由に力を発揮できる環境を整備することであつて、政府が自ら百事に手を下し、いろいろ干渉して民間の活動を妨害することではない。近代国家にとって、外交、国防など政治の中央集権化は不可欠であるとしても、治安、教育、医療など地域住民の日常生活に密着した行政は地方分権化すべきである。その方が地域の必要と状況の変化とに柔軟に対応することができる。行政の中央集権化は、一時的には国民の力を一カ所に結集し、効率的に資源を活用することができる。に見えるが、長期的には官民双方を墮落させ、さまざまな弊害を生む可能性<sup>136</sup>がある。なかでも教育行政の中央集権化は、時に、国民の思想誘導、ひいては思想統制につながり、人民の精神を萎縮させる危険性がある。(戦前の日本はそれを経験した。)もちろん官の充実が望ましくないことではない。しかしそれは、官を支える民間の力の充実があつて、はじめて意味をもつものである。官と民の力のバランスが崩れれば、弊害ばかりが大きくなる。福沢が開成学校講義室で、「(諭吉は)政府の多事を悦ばず、官学校の盛大を願わずして、ただ事務の精密を祈る」と演説したのは、このような考えからであらう。

教育における官の役割は、中央に模範となる「小にして高尚な」モデル校を建て、民間の学校にそれを示すことにあり、政府自ら手を下し全国に学校を建て、これを管理統制し、教師や教科書を官の支配下に置くことでは

ない。そのような市民社会の領域への官の侵入と過度の干渉は、人民の多様で自発的な活動を阻害し、文明の進歩を妨げることになると福沢は考えた。<sup>137</sup>しかし、その後の日本の教育の歩みは福沢の望んでいない方向に向かった。官に向かう人心の流れを、福沢論吉も止めることはできなかった。その意味で近代日本の教育の歩みは、福沢路線からの逸脱とみなすことができるのである。<sup>138</sup>

われわれは、近代日本における官への権力の集中を『歴史の必然』と片付けてしまうのではなく、明治期の日本にあり得た別の選択肢の可能性をはっきりと認識すべきであろう。

## 注

本稿は一九八二年に慶應義塾大学社会学研究科に提出した修士論文「修業時代の浜尾新」をもとに、それ以後発掘された史料や発表された諸研究を参考にしてあらたに書き直したものである。本文の記述において年代・月日の表記は、明治五年末までは旧暦（陰暦）、明治六年以降は西暦（陽暦）を用いた。引用文は適宜句読点を付し、場合により旧漢字を常用漢字あるいはひらがなに置き直した。

本稿執筆に際しては、かつての修士論文の指導教授であった村井実先生に今回も貴重なご意見を賜り、また初期慶應義塾の様子や豊岡藩の古文書の解説等については福沢研究センターの河北展生、佐志伝両先生にご教示をいただいた。豊岡藩の史実の確認や史料の閲覧に関しては、元豊岡市史編集室の小谷茂氏、現豊岡市史料整理室の山口久喜氏、および豊岡の郷土史家宿南保氏にお世話になった。また猪子清文書の閲覧については、兵庫県公館県政資料館（神戸）と兵庫県立歴史博物館（姫路）のご協力を得た。記して感謝を表したい。

(1) 『豊岡誌 全』（一九四二、復刻版一九七五）二七三―二八三頁。『豊岡市史』上巻（一九八一）五六二―五七一頁。

(2) 山本慈昭『飯田市建設の祖 京極高知公伝』（一九六九）、徳永眞一郎『近江源氏の系譜』（一九七五）、および『豊

岡市史』上巻（一九八一）三四六一三五三頁参照。

- (3) 京極紀陽『但馬住』（一九五二）、および『現代日本文学全集』第九十一巻（一九五三）二八八頁。
- (4) 河本重次郎『河本重次郎回顧録』（一九三六）一五一一二六頁。
- (5) 横山達三『文部大臣を中心とした日本教育の変遷』（大正三）二二二頁
- (6) 宿南保『浜尾新』（一九九一）一三一―一五頁。
- (7) 『豊岡誌 全』一二六頁。
- (8) 河本前掲書、一四頁。
- (9) 学生会編『故浜尾子爵葬儀記事並追悼録』（大正十四）七三―七四頁。
- (10) 宿南前掲書、三九頁。
- (11) 河本前掲書、二二―二三頁。
- (12) 池田草庵の学問については、岡田武彦二松学舎大学教授、および慶應義塾斯道文庫阿部隆一教授にご教示を受けた。
- (13) 豊田小八郎『但馬聖人』（一九〇七）四六頁。
- (14) 西村英一編『池田草庵先生日記 山窓功課』（一九七九）下巻、九四―一二八頁。
- (15) 宿南前掲書、三二頁。
- (16) 同上。
- (17) 『故浜尾子爵葬儀記事並追悼録』六九頁。
- (18) 宿南前掲書、六〇頁。
- (19) 宿南前掲書、三二―三七頁。
- (20) 文部省編『日本教育史資料』第二巻、三九九頁。
- (21) 吉田昇『近世諸藩に於ける遊学規定』『日本教育史学会紀要』第二巻（一九四六）二二七頁。
- (22) 文部省編『日本教育史資料』第二巻、三九九頁。
- (23) 河本前掲書、一三頁。
- (24) 『豊岡誌 全』一四三―一四四頁。

- (25) 舟木家文書（舟木直光氏所蔵分）
- (26) この部分につづく豊岡藩および藩主京極高厚の動きに関する部分は、神戸新聞社『故郷燃える』第三卷 維新編（一九七二）二八七―三四七頁の記述をもとにした。なお、この本の豊岡藩に関する記述は、猪子清の日記「日慎録」をはじめとする猪子家文書をもとに書かれている。
- (27) 橋南漁郎（斎藤修一郎？）『大学学生溯源』（明治四十三）一二〇頁。
- (28) 吉村寅太郎『義塾懷旧談』『三田評論』二五三号（大正七年八月号）六六頁。
- (29) 宿南前掲書、六二頁。
- (30) 猪子清「日慎録」慶應四年戊辰四月、兵庫県公館県政資料室所蔵。
- (31) 高橋善七『寺島宗則』（一九八九）三〇四頁。
- (32) 『明治維新人名辞典』（一九八一）七三―七四頁。
- (33) 『内外新報』第一六号（慶應四年四月一八日）七七丁ウラゝ八〇丁オモテ、および『慶應義塾百年史』上巻（一九五八）二五四―二五五頁。
- (34) 曾我鍛『中江種造伝』上（昭和十五）一二二―一二三頁。
- (35) 『固有席次』は豊岡の舟木家文書（直光氏所蔵分）の中にある。
- (36) 河本前掲書、一四頁。
- (37) 『故浜尾子爵葬儀記事並追悼録』六九頁。
- (38) 『福沢諭吉全集』別巻（一九七二）一五頁。
- (39) 富田正文『考証福沢諭吉』（上）（一九九二）一二九、一二八―一二九頁。
- (40) この命名については、筆者が直接中山教授からうかがった。なお、三度の洋行と慶應義塾創設の関連については、佐志傳「会社、同社そして社中」『近代日本研究』第一卷（一九八四）を参照のこと。
- (41) 『福沢諭吉全集』第十七卷（一九六一）七―八頁。
- (42) 河北展生『草創期の慶應義塾と中津藩士の入門』（福沢記念選書二四）（一九七九）。
- (43) 立田革『義塾懷旧談』『三田評論』二五〇号（大正七年五月号）五五頁。



- (44) 『慶應義塾百年史』 上巻 (一九五八) 二四〇―二四三頁。
- (45) 森春吉『義塾懷旧談』、『三田評論』二四〇号 (大正六年七月号) 五四頁。
- (46) 『三田演説第百回の記』 (明治十) 『福沢諭吉全集』第四卷 (一九五九) 四七七―四七八頁。
- (47) 石河幹明『福沢諭吉伝』第一巻 (一九三二) 六二〇―一二頁。幕末の福沢塾から明治の慶應義塾への変貌については、馬場辰猪の証言もある。『馬場辰猪全集』第三巻 (一九八八) 六四―六九頁。
- (48) 石河前掲書四二―頁。
- (49) 明治初年当時は、「当番制で交代で塾長に任じたものであった」。小幡甚三郎は『明治三年当時、塾長の任にあり、同四年に塾舎が三田に移った当初まで在任していたらしい』とされるが、前任者の阿部泰蔵は『明治二年に三ヵ月ほど塾長をつとめたという』ことなので、明治二年後半から小幡甚三郎が塾長あるいはそれに近い任にあった可能性がある。(『慶應義塾百年史』付録 (一九六九) 一二―一三頁)
- (50) 須田辰次郎『義塾懷旧談』、『三田評論』二三二号 (大正五年十一月号) 六一頁。
- (51) 『慶應義塾百年史』上巻、三〇〇―三〇一頁。
- (52) 『慶應義塾新議』 (明治二) 『福沢諭吉全集』第十九卷 (一九六二) 三七―三七二頁。
- (53) 中山一義『芝新錢座慶應義塾之記』に関する若干の考証 (二) 『史学』第四十一卷二号 (一九六八) 一四頁参照。
- (54) 『慶應義塾百年史』上巻、二六〇―二六二頁、および中山前掲論文一七一―一八頁。
- (55) 富田正文校注『新版福翁自伝』一〇頁注。
- (56) 須田辰次郎『義塾懷旧談』、『三田評論』二三二号 (大正五年十一月号) 六三頁。
- (57) 富田正文校注『新版福翁自伝』一〇―一一頁注。
- (58) 白木生『義塾懷旧談』、『三田評論』二五五号 (大正七年十月号) 五四頁。白木はペンネーム。本名は不明。
- (59) 須田辰次郎『余の在塾中に於ける珍談奇聞』、『三田評論』二三三号 (大正五年二月号) 七―八頁。
- (60) 石河幹明『福沢諭吉伝』第一巻、六四―一頁。
- (61) 白木生『義塾懷旧談』五三頁。
- (62) 須田辰次郎『義塾懷旧談』、『三田評論』二三二号、六二頁。

- (63) 波多野承五郎『明治初年『慶應』の塾風』『三田評論』三八七号(昭和四年十一月号)六頁。
- (64) 吉村寅太郎『義塾懷旧談』六六一六七頁。
- (65) 福沢研究センター編『慶應義塾入社帳』第一卷(一九八六)二七七頁。
- (66) 吉村寅太郎『義塾懷旧談』六七頁。
- (67) 『慶應義塾百年史』上巻、二八三頁。『福沢論吉全集』第十七卷七二頁、七九頁。
- (68) 『慶應義塾百年史』上巻、二八三頁。
- (69) 須田辰次郎『余の在塾中に於ける珍談奇聞』六頁。
- (70) 『慶應義塾百年史』上巻、三〇八―三一二頁。
- (71) 須田辰次郎『余の在塾中に於ける珍談奇聞』七頁。
- (72) 森春吉『義塾懷旧談』『三田評論』二四〇号(大正六年七月号)五四頁。
- (73) 後藤牧太『義塾懷旧談』『三田評論』二二九号(大正五年八月号)四五頁。
- (74) 猪子清『己巳九月二十六日 東京記行』兵庫県立歴史博物館所蔵。
- (75) 吉村寅太郎『義塾懷旧談』六六頁。
- (76) 栗本東明『義塾懷旧談』『三田評論』二五八号(大正八年一月号)六六頁。
- (77) 加藤木重教『義塾懷旧談』『三田評論』二五〇号(大正七年五月号)六一頁。
- (78) 宿利重一『莊田平五郎(昭和七)三〇三―三〇五頁。
- (79) 『慶應義塾百年史』上巻、三三〇頁。
- (80) 『門野幾野進先生事跡・文集』(昭和十四)一六七頁。なお、『慶應義塾百年史』には『慶應義塾から高島学校へ派遣された教師として小谷忍、和田義郎、莊田平五郎、海老名晋、村尾真一等の名前があげられている。』慶應義塾百年史』上巻、三九七頁。
- (81) 『福沢論吉全集』第十五卷(一九六一)五三四頁。
- (82) 吉村寅太郎『義塾懷旧談』六七―六八頁。
- (83) 吉村寅太郎『義塾懷旧談』六八頁。

- (84) 同上。
- (85) 同上。
- (86) 宿南前掲書、八七頁。
- (87) 河本前掲書、四八―五〇頁。
- (88) 『福沢諭吉全集』第十七卷、一四九―一五〇頁
- (89) 吉村寅太郎『義塾懷旧談』六八頁。
- (90) 同上。
- (91) 宿南前掲書、一三八―一四二頁。
- (92) 例えは、『福沢諭吉全集』第十八卷(一九六二)四五頁参照。
- (93) 『福沢諭吉全集』別卷(一九七一)三五頁。
- (94) 宿南前掲書、一三八―一三九頁参照。
- (95) 『福沢諭吉全集』第十八卷、七五―七五六頁。
- (96) 奥羽日日新聞 明治三十年三月十日、同十三日十六、十七、二十四日。
- (97) 『第二高等学校史』第二高等学校尚志会(一九七九)一一六頁。
- (98) 同上、一一五頁。
- (99) 同上、一一六頁。
- (100) 同上、六八頁。
- (101) 奥羽日日新聞 明治三十年三月一二日。
- (102) 加太邦憲『加太邦憲自歴譜』(一九三一)三二一頁。
- (103) 野依秀一編『慶應義塾出身名流列伝』(明治四十二)一二九頁。
- (104) 神辺靖光『明治初期 東京の私塾』城石叢書第一輯(一九六〇)六五頁。
- (105) 橋南漁郎『大学学生溯源』一四四頁。
- (106) 石河幹明『福沢諭吉伝』第二卷(一九三二)二〇五頁。

- (107) 三田演説会の創設については、松崎欣一『三田演説会と慶應義塾系演説会』（一九九八）慶應義塾大学出版会、第二章を参考にした。
- (108) 東京開成学校『開成学校講義室発会演説』（明治十年三月）六頁。同演説は『福沢諭吉全集』十九卷（一九六二）六二八―六三二頁に再録されている。
- (109) 石河前掲書、二三九頁。
- (110) 石河前掲書、四三〇頁。この浜尾の言葉の出典について福沢諭吉協会の富田正文氏にうかがったところ、恐らく『福沢諭吉伝』の編纂に参画していた菅学応氏が直接浜尾氏に会って聴いてきたものだろう、とのことであった。
- (111) 三宅雪嶺『大学今昔譚』我観社（一九四六）三九頁。
- (112) 石河前掲書、四三〇頁。
- (113) 曾根松太郎『当世人物評』金港堂（明治三十五）九六頁。
- (114) 三宅前掲書、四一頁。
- (115) 『開成学校講義室発会演説』二四―二九頁。
- (116) 三宅前掲書、三八―四四頁および『東京大学百年史』通史一（一九八四）四七六―四七七頁。
- (117) 明治二十二年前後のことと思われるが、当時日本新聞記者をしていた古島は新聞紙に対する政府の発行停止というものの廃止運動を起こしていた。「何でも浜尾先生が一番頑固な保存論者だと承り、自分から出かけ」て行き、浜尾にその廃止を訴えたが一切取り上げてもらえなかった。そのことに関連して、古島は「浜尾先生が天皇を中心とする日本国家に対する純忠至誠のお心持ちは十分に受け入れる事が出来るが、サテ政治の方針になると官僚と民間論者との間にはあまりにも大なる距離のある事を知ったと同時に、またや例の反抗性がムクムクと持ち上がり、私は先生こそ日本における官僚の最好典型だなどと放言したことがありました」と書いている。古島一雄「浜尾先生を追悼す」『故浜尾子爵葬儀記事並追悼録』七〇頁。もともと浜尾が真に「官僚の典型」であったかどうかは議論の余地がある。同「追悼録」中の記事を読むと、多くの寄稿者が浜尾の権威ぶらない姿にふれ、そのうちの一人末延道成は「官僚という気風は少しもなかった全く平民的人であった」と追想している。（末延道成「大器晩成と浜尾先生」『故浜尾子爵葬儀記事並追悼録』三八頁）

- (118) 田住豊四郎『現代兵庫県人物史』（明治四十四）六一四頁。
- (119) 『慶應義塾百年史』上巻、三六六―三七三頁。
- (120) 『豊岡誌』全、一六七頁。
- (121) 古島一雄『浜尾先生を追悼す』六九頁。
- (122) 宿南前掲書、一二七―一三〇頁。
- (123) 鳥潟隆三『猪子止戈之助先生の事ども』『日本医事新報』第二二八号（昭和二十三年十一月十三日）一三一―一四頁。
- 田住前掲書、一六一―一六四頁。宿南前掲書、一四四、一五〇―一五〇頁。
- (124) 『医学博士猪子吉人先生の伝』『中外医事新報』第三二八号（明治二十六年十一月二十日）四八―四九頁。田住前掲書、一六六―一六七頁。
- (125) 曾根松太郎『当世人物評』一〇〇―一〇一頁。
- (126) 『豊岡誌』全、一六六―一六九頁。済美塾は済美義塾とも呼ばれ、塾規には「在塾生は独立の氣象を發揮し品性を陶冶し切磋琢磨もつて善良なる学生青年たるを期すべし」とある。同書、一六七―一六八頁。
- (127) 『慶應義塾百年史』上巻、七二四頁。塾生への公費支給の廃止の経緯とそれに伴う入塾生の減少については、『慶應義塾百年史』上巻、第四章 維持経営の困難と打開、第二節 義塾経営の危機、七二〇―七三七頁に詳しい説明がある。
- (128) 同上、七二三頁。
- (129) 同上、七二五頁。『福沢諭吉全集』十九巻、三八五―三八六頁。
- (130) 『福沢諭吉全集』十九巻（一九六二）四二五―四二八頁。
- 徴兵令改正とそれをめぐる福沢と文部省のやりとり、またその後の文部省の私学抑圧政策については、寺崎修『明治十年代の文部省と慶應義塾』『福沢諭吉年鑑』第二十六巻（一九九九）一五七―一六八頁が詳しい。また富田正文『考証福沢諭吉』下巻（一九九二）五四二―五四六頁、『慶應義塾百年史』上巻、八〇五―八一六頁も参考にした。
- (131) 寺崎修前掲論文、一六三―一六六頁より引用。
- (132) 福沢諭吉『社会の弊習は根底より断つべし』『福沢諭吉全集』第十四巻（一九六二）三八〇頁。

- (133) 「私立学校の将来」『教育壇』第一号（明治三十年十二月）六三頁。
- (134) 今井登志喜「大学教育の功勞者としての浜尾新先生」『教育』第三卷九号（一九三五）三十頁。
- (135) 三宅雄二郎「東西両大学総長」『中央公論』二十五卷四号（明治四十三）
- (136) トクヴィル『アメリカの民主政治（上）』（一九八七）講談社学術文庫、一七六頁、および吉家定夫「福沢諭吉と近代日本の公教育」『三田評論』一〇三二号（二〇〇一年一月号）五四―五五頁参照。
- (137) 福沢諭吉『開成学校講義室發会演説』（明治十年三月）『福沢諭吉全集』一九卷（一九六二）六二八―六三一頁、福沢諭吉「分権論」（明治十）『福沢諭吉全集』第四卷二六九頁、および丸山真男「福沢諭吉選集第四卷解題」（一九五二）『丸山真男集』第五卷（一九九五）二二―二四四頁参照。
- (138) 竹内好「日本とアジア」（一九六六）『竹内好評論集』第三卷、二三五頁参照。

（よしいえ さだお 本塾大学文学部講師）